

上野原町埋蔵文化財調査報告書 第9集

# 原・郷原遺跡

県営中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000.9

上野原町教育委員会  
山梨県都留土地改良事務所

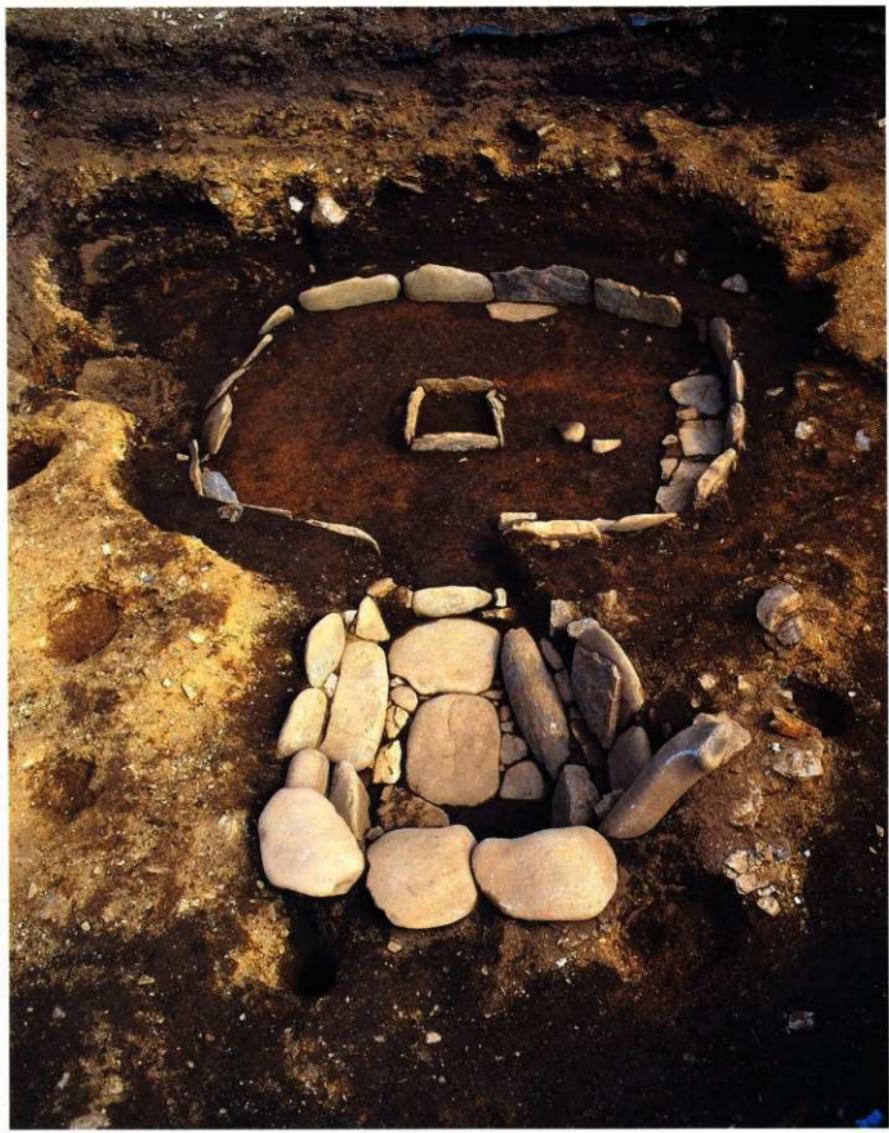
上野原町埋蔵文化財調査報告書 第9集

# 原・郷原遺跡

県営中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000.9

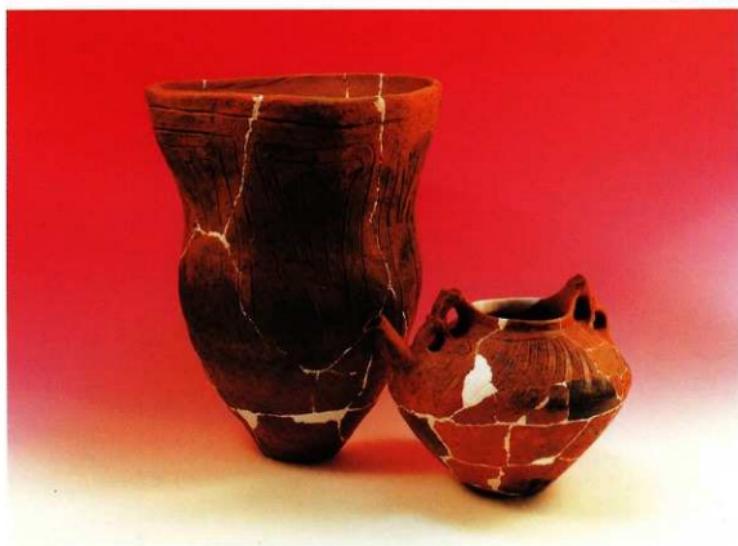
上野原町教育委員会  
山梨県都留土地改良事務所



1 1号住居址全景



2 遺跡遠景



3 遺跡出土土器

## 序

本書は、平成9年度、県営中山間地域総合整備事業に伴って発掘調査された上野原町西原地区「原・郷原遺跡」の調査結果をまとめたものです。

原・郷原遺跡では、これまで、周辺の畠から土器や石器の破片が多く採集されてきましたが、本格的な発掘調査は今回が初めてでした。調査の結果、縄文集落址の一角が発見され、学術的に貴重な成果が得られました。とくに、精緻で美しい敷石を持つ住居址や、復元された土器の流麗な文様からは、当時の人々が持つ高度な技術や、素晴らしい感性を読み取ることができます。

そして、はるか数十年前の大昔、この山深い地に人々の歓声がこだましていたことを思う時、先人たちによって繰り広げられてきた様々なドラマや歴史の重みを感じます。

最後に、調査にあたってご協力いただいた関係者、関係機関、ならびに発掘・整理作業に携わっていただいた方々に、厚くお礼を申し上げます。

平成12年9月

上野原町教育委員会

教育長 水上和男

## 例 言

1. 本書は、山梨県北都留郡上野原町西原地内、原・郷原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、県営中山間地域総合整備事業に伴って実施された農道原・郷原線道路改良工事の事前調査で、山梨県都留土地改良事務所の委託を受けて実施された。
3. 発掘調査は上野原町教育委員会が実施した。現場調査時の組織はつぎのとおりである。

事務局 教育長 遠藤諦三  
社会教育課長 水越辰巳  
社会教育課長補佐兼係長 高橋武久  
担当者 社会教育係主事 小西直樹  
参加者 会津源、桑原福寿、村島敬一、中川仁、奈良春雄、降矢本正、山本哲、武原孝之、橋本千代野、中川愛子、臼井茂美、古根村典子、長田貞夫、加藤文宣、築地文博  
4. 炭化材の樹種同定等をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、分析結果は付篇に示した。  
5. 本書の執筆・編集は、小西直樹が行った。  
6. 発掘調査から本書の作成までを通して、つぎの方々のご教示・ご協力をいただいた。記して感謝申しあげます。  
出月洋文（山梨県学術文化財課）、余良泰史（都留市教育委員会）、杉本正文（大月市教育委員会）、  
中井均（都留文科大学）、笠原みどり（山梨県埋蔵文化財センター）、武原清壽（原区長）、古家正一  
(郷原区長) 敬称略・順不同  
7. 本書にかかわる出土品・記録図面等は一括して上野原町教育委員会が保管している。

## 凡 例

1. 遺構の縮尺は1/60を基本としたが、炉および埋設土器・焼土址・配石の一部は1/30とした。
2. 遺物の縮尺はつぎのとおり。  
土器・石器1/3、大型土器・石器1/4、小型石器2/3あるいは原寸
3. 遺構図の水糸高は海拔高（m）を示す。
4. ピットの数値は床面からの深さ（cm）を示す。

## 目 次

序	
例 言	
凡 例	
第Ⅰ章 遺跡の位置と周辺の環境 .....	1
第1節 遺跡の位置 .....	1
第2節 周辺の遺跡 .....	3
第Ⅱ章 調査の経緯 .....	4
第1節 調査にいたる経緯 .....	4
第2節 調査の経過 .....	5
第3節 調査の方法 .....	5
第4節 遺跡の層序 .....	5
第Ⅲ章 調査の成果 .....	7
第1節 繩文時代 .....	7
(1) 敷石住居址 .....	7
(2) 壴穴住居址 .....	31
(3) 埋設土器 .....	36
(4) 焼土址 .....	36
(5) 配石 .....	38
(6) 遺構外出土遺物 .....	43
第2節 近世 .....	52
(1) 土坑 .....	52
第3節 時期不明 .....	52
(1) 立石 .....	52
(2) 土坑 .....	53
第Ⅳ章 まとめ .....	55
付 編 原・郷原遺跡における自然科学分析 .....	57
パリノ・サーヴェイ株式会社	

## 挿図目次

第 1 図	遺跡の位置	1
第 2 図	周辺の地形	2
第 3 図	周辺の遺跡分布	3
第 4 図	調査区の配置	4
第 5 図	遺構全体配置図	6
第 6 図	1号住居址	8
第 7 図	1号住居址掘り方	9
第 8 図	1号住居址遺物分布	10
第 9 図	1号住居址出土土器	11
第10図	1号住居址出土土器・土製品	12
第11図	1号住居址出土石器	13
第12図	1号住居址出土石器	14
第13図	1号住居址出土石器	15
第14図	2号住居址	16
第15図	2号住居址配石	17
第16図	2号住居址遺物分布	17
第17図	2号住居址掘り方	18
第18図	2号住居址出土土器	19
第19図	2号住居址出土土器	20
第20図	2号住居址出土石器	21
第21図	2号住居址出土石器	22
第22図	2号住居址出土石器	23
第23図	3号住居址	24
第24図	3号住居址炉	25
第25図	3号住居址遺物分布	25
第26図	3号住居址出土土器	27
第27図	3号住居址出土土器	28
第28図	3号住居址出土土器	29
第29図	3号住居址出土土器・石器	30
第30図	4号住居址	31
第31図	4号住居址出土土器	32
第32図	5号住居址, 7号配石	33
第33図	5号住居址覆土中の遺構・遺物分布, 6号配石	34
第34図	5号住居址出土土器	35
第35図	1号堀設土器, 1号焼土址	36

第37図	1号焼土址出土土器・石器	37
第38図	1号～5号配石	39
第39図	2号配石出土土器・石器	40
第40図	3号配石出土土器・土製品	40
第41図	4号配石出土土器	41
第42図	5号配石出土石器	41
第43図	6号配石出土土器・石器	42
第44図	7号配石出土土器	43
第45図	遺構外出土土器	44
第46図	遺構外出土土器	45
第47図	遺構外出土土器	46
第48図	遺構外出土土器	47
第49図	遺構外出土土器	48
第50図	遺構外出土石器	49
第51図	土器分布・接合図(5ライン以北)	51
第52図	5号～7号土坑	52
第53図	1号立石	53
第54図	1号～4号土坑	54

## 表目次

第1表	石器観察表	50
-----	-------	----

## 写真図版

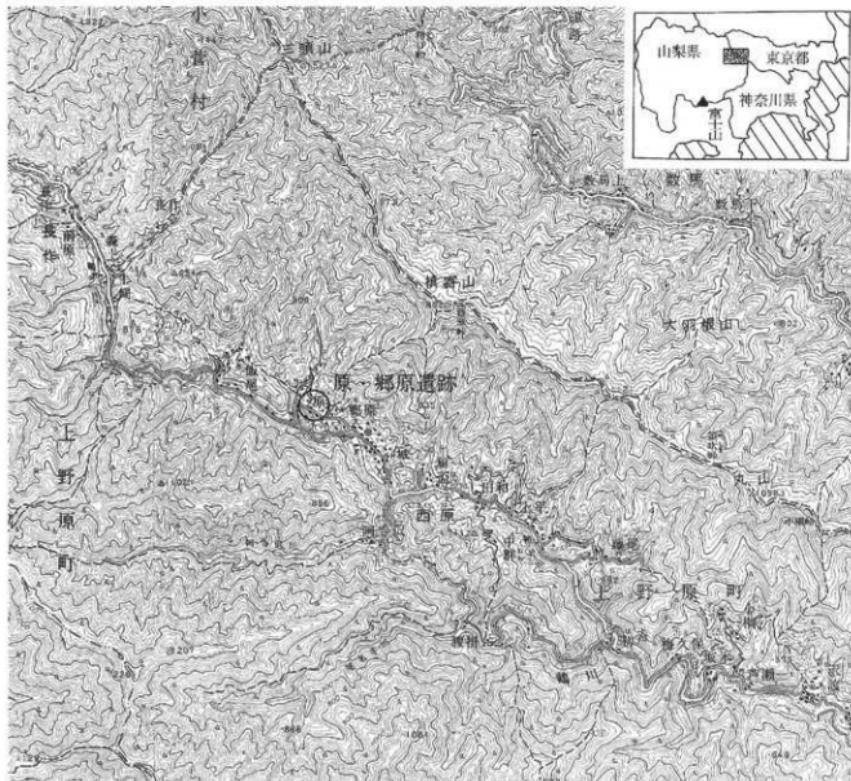
- 卷頭図版1 1号住居址
- 卷頭図版2 遺跡遠景
- 卷頭図版3 遺跡出土土器
- 図版1 調査地遠景、近景、調査風景
- 図版2 1号住居址・掘り方
- 図版3 1号住居址炉・敷石・確認状況
- 図版4 2号住居址・掘り方
- 図版5 2号住居址疊帶・配石
- 図版6 3号住居址・掘り方
- 図版7 4号住居址、5号住居址
- 図版8 1号埋設土器、1号配石

- 图版9 2号配石、3号配石
- 图版10 4号配石、5号配石
- 图版11 6号配石、7号配石
- 图版12 配石群全景、1号立石、1号土坑、2号土坑、5号土坑
- 图版13 1号住居址出土土器
- 图版14 1号住居址出土石器
- 图版15 2号住居址出土土器
- 图版16 2号住居址出土石器
- 图版17 3号住居址出土土器
- 图版18 3号住居址出土石器、4号住居址出土土器
- 图版19 5号住居址·1号埋设土器·1号烧土址出土土器
- 图版20 2号配石·3号配石·4号配石·6号配石·7号配石出土土器
- 图版21 2号配石·5号配石·6号配石出土石器
- 图版22 遗構外出土土器
- 图版23 遗構外出土土器·石器

## 第Ⅰ章 遺跡の位置と周辺の環境

### 第1節 遺跡の位置

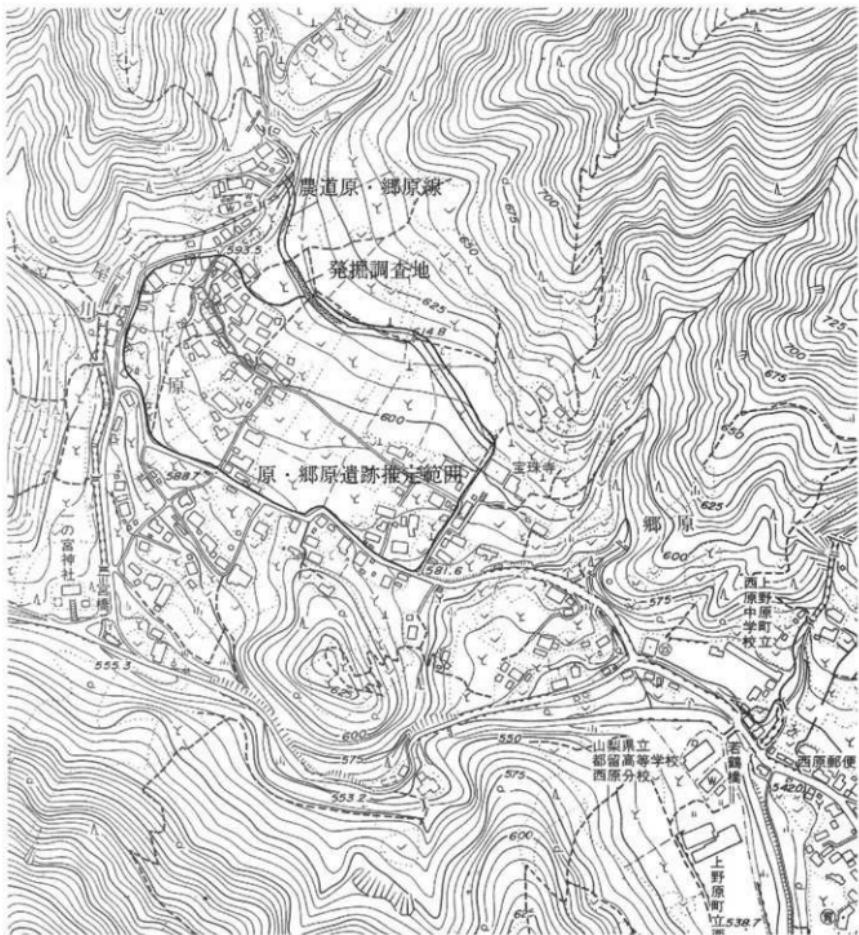
原・郷原遺跡は、山梨県北都留郡上野原町西原地区に位置する。西原は山梨県東端に位置し、標高1,000m前後の山々に囲まれている。地区の中央を桂川の支流である鶴川が流れ、現在の集落は川沿いのわずかな平地や山の中腹に点在している。最高峰の三頭山(1,527m)から南東に続く尾根筋は東京都檜原村との境で、昭和5年に県道上野原一丹波山線が開通するまでは、西原地区と東京都多摩西部や埼玉県秩父方面とを結ぶ重要な交通路であった。昭和30年代以前の主要産業は林業と養蚕で、麦・雑穀・芋類の栽培が盛んであった。



第1図 遺跡の位置 (1/50,000)

原・郷原遺跡は町内最北の遺跡で、檜寄山（1,188m）南西麓の台地上に位置する。この台地は西原地区の中で比較的広大な面積を持ち、南を鶴川、東西を支流の谷筋で囲まれている。台地上は、わずかな平地から北方向に向かって緩やかに迫り上がった地形を呈し、現在は原・郷原の二集落が立地している。この台地上一帯が遺跡範囲と推定されている。

今回の調査地点は方屋川に面した西側斜面を中心で、これまで知られていた遺跡範囲の中では最高位に位置する。調査地点の標高は約630～635m。現状は畠地で、下方に原集落が位置する。



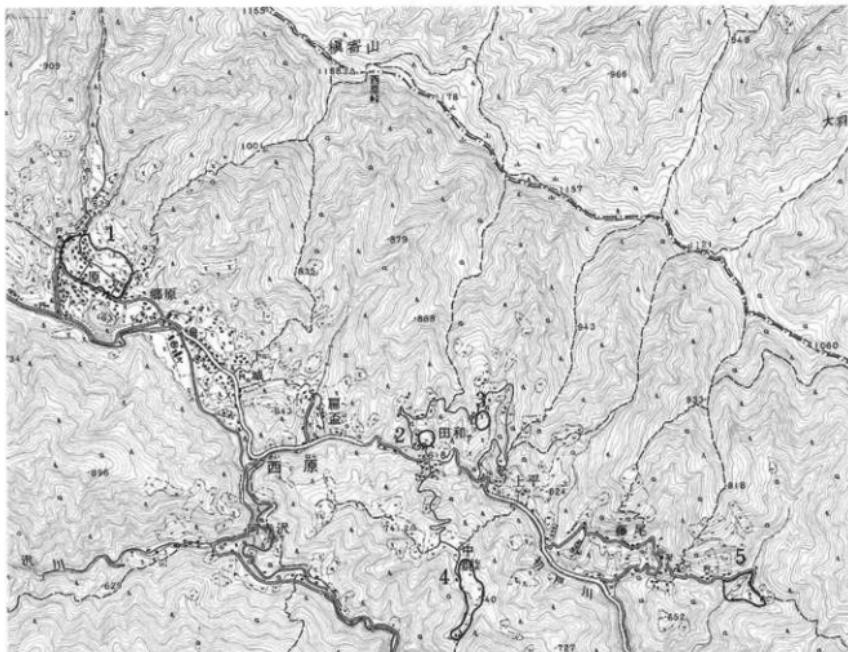
第2図 周辺の地形 (1/5,000)

## 第2節 周辺の遺跡

西原地区の遺跡は、川沿いの斜面地などで確認されていて、縄文時代が多い。

中群遺跡は山頂に位置し、前期・中期の土器片が採集されている。また、黒曜石やチャート製の小型石器（石鏃・石匙・スクレイバー・尖頭器状に加工された剥片）などがあり、このうちの一部は旧石器の可能性が指摘されている（上野原町誌1975）。田和遺跡は昭和22年（1947）に発掘調査され、中期後半の住居址やクリと思われる炭化穀実、石皿・凹石・石斧・石鏃・石匙などが検出されたというが詳細は不明である（山本1968）。上平遺跡は、前期後半諸磽式、中・後期の土器片や石鏃などの他、土師器片が採集されている。

原・郷原遺跡は西原地区で最も大きい遺跡である。遺物量は多く、前期から晩期の土器や石皿・石斧・石鏃などの石器が採集されている。最近の試掘調査では平安時代の甲斐型坏片も出土している（未報告）。



1 原・郷原遺跡（縄文前・中・後・晩期） 2 田和遺跡（縄文前・中・後期・古墳・平安） 3 上平遺跡（縄文前・中・後期・平安） 4 中群遺跡（先土器・縄文前・中） 5 藤尾遺跡（縄文中・後期）

第3図 周辺の遺跡分布 (1/25,000)

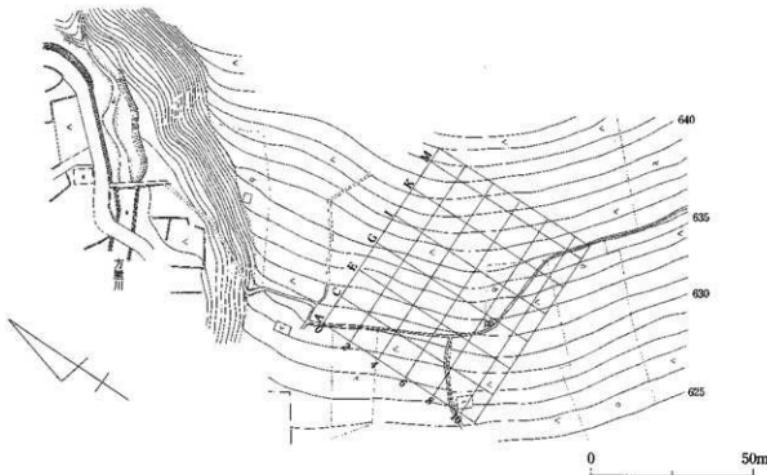
## 第Ⅱ章 調査の経緯

### 第1節 調査にいたる経緯

平成9年から5カ年計画で始まった県営中山間地域総合整備事業の一環として、上野原町では西原・桐原地区において農業基盤の整備が図られることとなった。この中で、西原地区の農道原・郷原線を延長400mにわたって拡幅・舗装する工事が計画された。この農道は原・郷原遺跡の北縁に位置していたことから、遺跡の取扱いについて山梨県都留土地改良事務所と町経済課、県教育委員会学術文化財課、町教育委員会社会教育課で協議し、まず試掘調査を行ない、その結果を踏まえて本調査の実施について検討することとなった。調査には町教育委員会があたることとなった。

試掘調査：平成9年6月24日、都留土地改良事務所から埋蔵文化財の発掘通知が提出されたのを受け、同年10月6日～13日、遺跡範囲確認を目的に試掘調査を実施した。対象範囲は、工事面積約1,200m<sup>2</sup>のうち方屋川に面した急傾斜地を除く約900m<sup>2</sup>とした。試掘溝29個所を調査した結果、西側斜面を中心に縄文時代の遺構・遺物が多数検出された。東側斜面では土石流の痕跡が複層して認められ、遺跡は存在しないことが確認された。

本調査：平成9年10月24日、町教育委員会から発掘通知を提出し、西側斜面を中心に巾3m・長さ80m、面積約240m<sup>2</sup>を本調査することとした。調査前の現地は、巾1m以下の土道が畑の間を縫うように通っている状況であった。このため周辺の畑作物の収穫を待って、同年11月18日に本調査に着手した。



第4図 調査区の配置

## 第2節 調査の経過

11月、調査開始後まもなく、調査区東側の表土直下で3軒の敷石住居址が確認された。

12月、1号住居址の一部が調査区外にかかっていたため、土地所有者の承諾をいただきて調査範囲を拡張し竪穴全体を検出した。一方、調査区西側の第Ⅱ層中から多量の縄文式土器片が出土し、約15cmずつ掘り下げながら遺物の取上げを行なったが、この過程で埋設土器や配石群も確認された。下旬には地元住人や小・中学生を対象に現地見学会を開催した。

1月、西側の調査は5号住居址を残しほぼ終了し、調査の主力を3軒の敷石住居址に移した。

2月、1号住居址の掘り方検出を最後に現地調査を終了した。

今回は厳冬期の調査となった。平年であれば地域特有の晴れて乾燥した日が続くのだが、この年は1月に入りて大雪がたび重なったため延べ2週間近く調査が中断し、さらに倒壊した休憩小屋の片付けや雪掻き作業に追われた。また、日陰では土壤が凍結してしまい、石油ストーブを持ち出して溶かす状況であった。このため、調査は遅々として進まず、現場作業の終了は2月13日であった。その後、2カ年にわたって出土品等の整理、及び報告書の作成作業を行った。

## 第3節 調査の方法

調査区に5mグリッドを設定した。グリットは、工事用の道路境界杭を起点にして南北を磁北に合わせた。

調査は、表土を重機で掘削した後、遺構・遺物を確認しながらすべて人力で掘り下げた。とくに調査区西側の第Ⅱ層は遺物が多量に含まれるため、ショコテで掘り下げながら遺物を検出した。遺物は原則として出土位置の平面・標高を計測して取り上げた。掘り下げは基本的にローム層上面までとしたが、調査区西側では試掘によって配石群下に遺構・遺物が確認されなかったため、それ以上の掘り下げは行なっていない。

## 第4節 遺跡の層序

今回の調査で土層を概ね5層まで確認した。全体に西方に向かって傾斜し、層厚は東で薄く西で厚い。すなわち、斜面上方にあたる調査区東側では表土直下が第Ⅳ層となるが、Dライン以西では土層の堆積が厚くなりローム層面まで最深約2.5mを測る。土層は全般に1cm以下の小砾を多量に含む。とくに試掘調査で遺跡が確認されなかった東側斜面では疊層が1層から3層にわたって介在し、土石流が断続的に発生していたことがうかがえる。

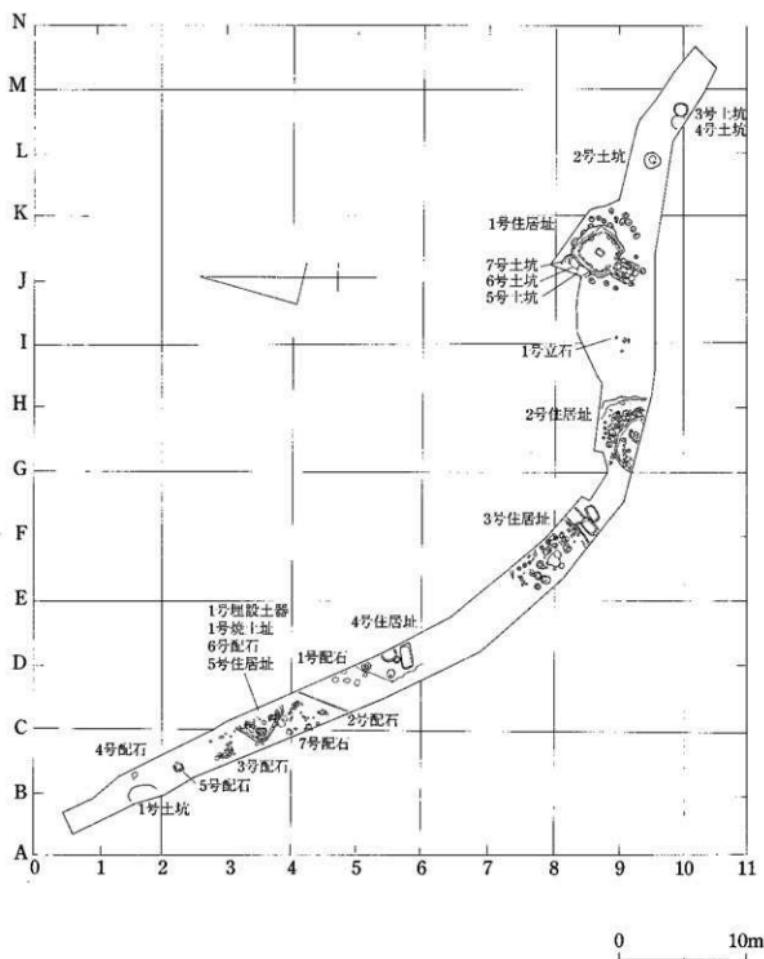
第Ⅰ層 表土(耕作土)。

第Ⅱ層 褐色土。調査区西側にのみ残存する。層厚は30cm~50cm。本層中から第Ⅲ層上面にかけて、縄文時代中期後半から後期の土器を包含し、配石群を確認している。

第Ⅲ層 暗褐色土。調査区西側にのみ残存する。

第Ⅳ層 にぶい褐色土。多量の小砾や10cm~30cm大の砾を含み、硬く掘りにくく。調査区東側の遺構は本層上面で確認された。

第Ⅴ層 橙褐色土。ローム層に相当する。



第5図 調査区全体図

## 第Ⅲ章 調査の成果

### 第1節 繩文時代

敷石住居址3軒、竪穴住居址2軒、埋設土器1基、焼土址1基、配石7基がある。時期は中期後半から後期前半に属す。遺構の分布は方屋川に面した西斜面に偏在し、とくに斜面下方に集中する傾向がある。今回の調査区は、これまで知られていた遺跡範囲の北縁に位置するが、さらに広がる可能性が大きい。遺構の確認面は、斜面上方で第IV層、斜面下方で第II層～第III層である。

#### (1) 敷石住居址

##### 1号住居址（第6～8図・図版2～3）

位置 K-8・9区。繩文時代の遺構の中では最高位に位置する。西9mに2号住居址がある。試掘調査の際、主体部縁石の一部が確認された。確認面は表土直下の第IV層上面である。

形状・規模 柄鏡型敷石住居址。竪穴が良好に残り、全長5.0m、主軸方位N-38°-E。主体部は一辺2.9mの隅丸方形を呈する竪穴。斜面下方に張出し部を持つ。張出し部は一辺1.7mの方形を呈する竪穴で、主体部との連結部では巾1.3mに狭まる。

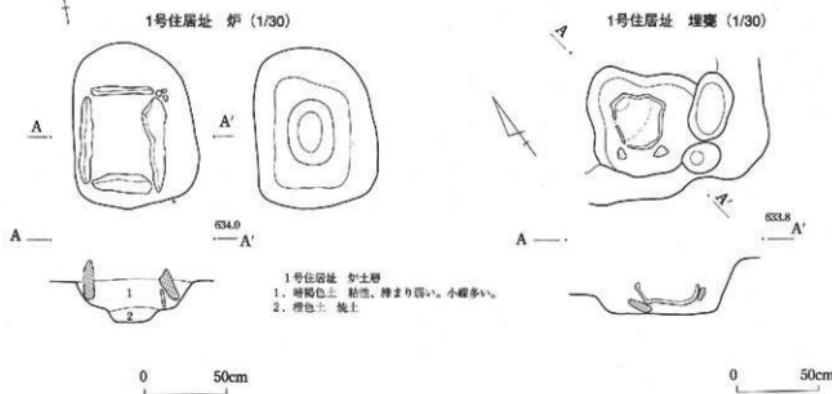
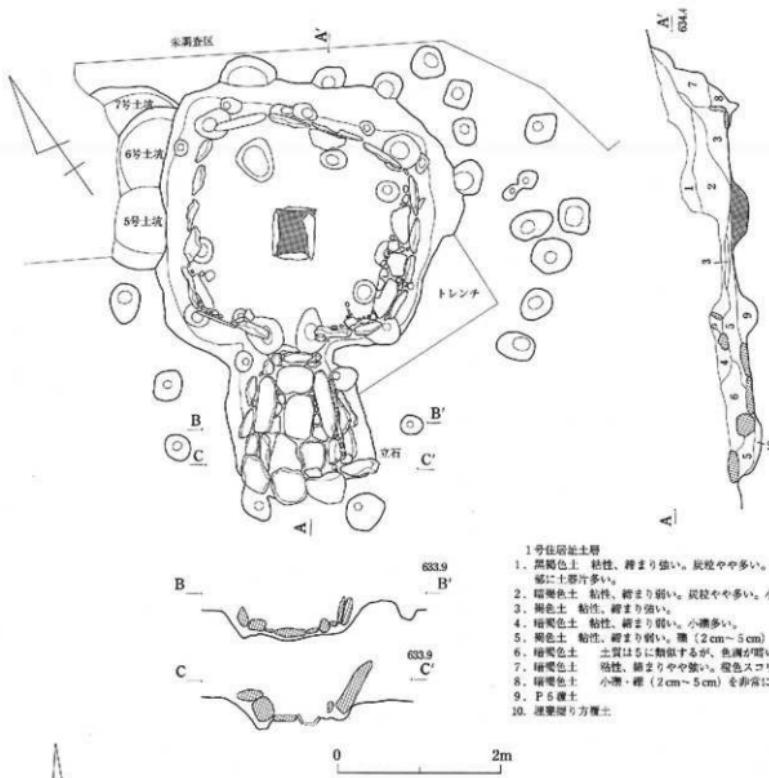
床・壁 床面は第V層中に構築されている。主体部では平坦だが、張出し部では先端に向かってゆるやかに傾斜している。

主体部の壁から10cm～30cm内側に縁石が並ぶ。縁石は40cm～60cm大の平石を立て並べたもので、西側では近世墓壙の影響で内側に傾いている。主体部床面の敷石は少なく、わずかに縁石内側に付随して平石が敷かれる程度である。硬化面は認められなかった。張出し部の敷石は全面に施され、先端部に向かって台形状に広がる。敷石の巾は連結部側で45cmと最も狭く、先端部では75cmを測る。敷石は、張出し部の中軸線に沿ってほぼ左右均整の取れた配置となっている。左右側壁には縁石が2段に積まれ、下段には長さ80cm～90cmの長大な石が用いられていた。張出し部先端の縁石は、壁上に平石を敷いたものである。

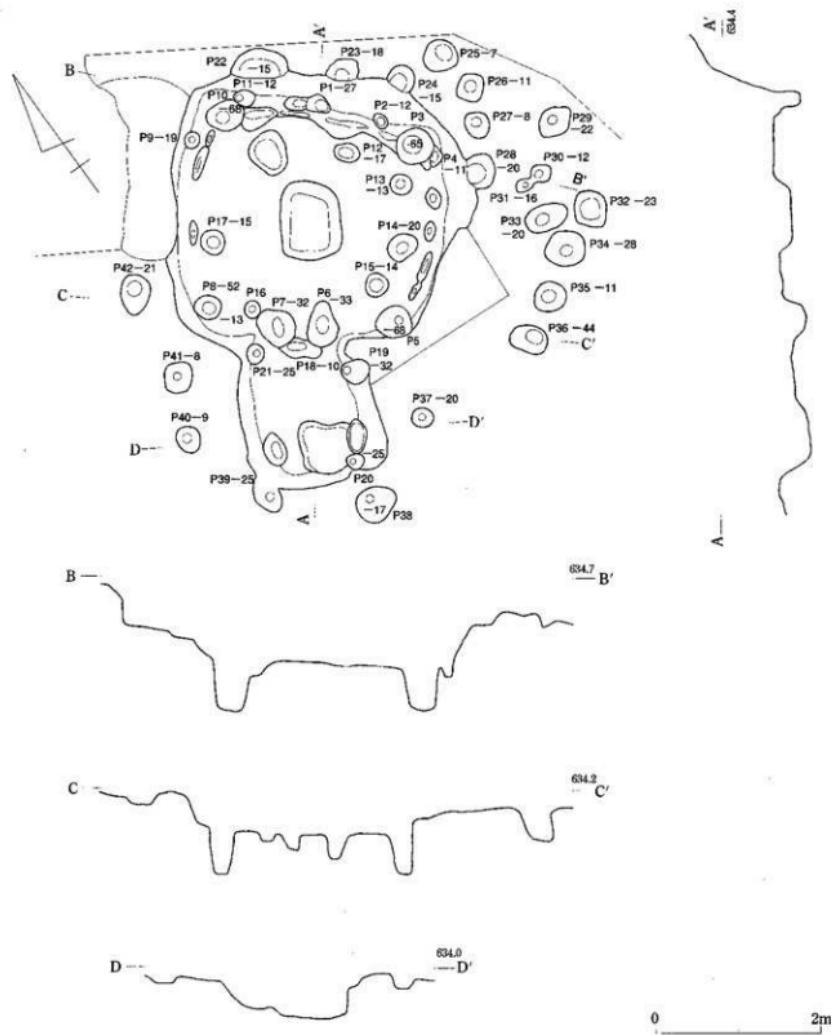
壁高は主体部奥壁で最高80cmを測り、張出し部に向かって高さを減じて先端では20cmとなる。壁はほぼ垂直である。

柱穴 ピットは竪穴の内外で確認された。竪穴内のピットは21基で、連結部のP18を除きすべて砾の隙間に配されていた。主体部内の四隅に配された50cmを超える深いピット（P3・5・8・10）は、主柱穴と考えられるものである。奥壁側には深さ11cm～27cmの比較的浅いピット5基が並ぶ。これらはいずれも縁石と壁の間に配されている。張出し部との連結部には約30cmの比較的深いピットが2基対になって配されている（P6・7）。張出し部では3基のピットが配され、このうちP20は立石の直下に位置する。一方、竪穴の外周に21基のピットが確認されたが、北側が未調査区にかかっているため、さらに多くのピットを想定できる。大半のピットは深さ28cm以下と比較的浅い。

炉 主体部中央に位置する。石匂い炉。平石4枚を立てて長方形に組み、長軸65cm、単軸50cmを測る。掘り方は長軸100cm、短軸80cmの不整長方形で、最深28cmである。覆土は2層に分けられ、底面に厚さ10cm程度の焼土が堆積していた。炉石内面の一部に土器片が密着していた。



第6図 1号住居址



第7図 1号住居址 掘り方

**埋甕と立石** 埋甕が張出し部の先端で確認された。縦に半裁した広口壺を、内面を上にして皿状に埋設したものである。埋甕に近接した壁際には高さ75cmの立石が積み重ねられていた。

**覆土** 7層に分けられる。下層は、地山に由来すると思われる小礫混じりの褐色土である。

**礫の集積** 炉の直上と張出し部内に礫の集積が認められた。炉の直上には約10cm～40cm大の、石器を含む礫8点が積み上げられた状態で検出された。一方、張出し部には、確認面から床にかけて多量の礫が充満していた。大きさは約5cmから50cmとまちまちで、石器や敷石と同種の平石も含まれる。いずれも大半が破損し、各集積内で接合関係は見られない。被熱痕を持つ礫はわずかであった。

#### 遺物（第9～13図・図版13～14）

土器27点、蓋状土製品1点、石器14点が出土した。

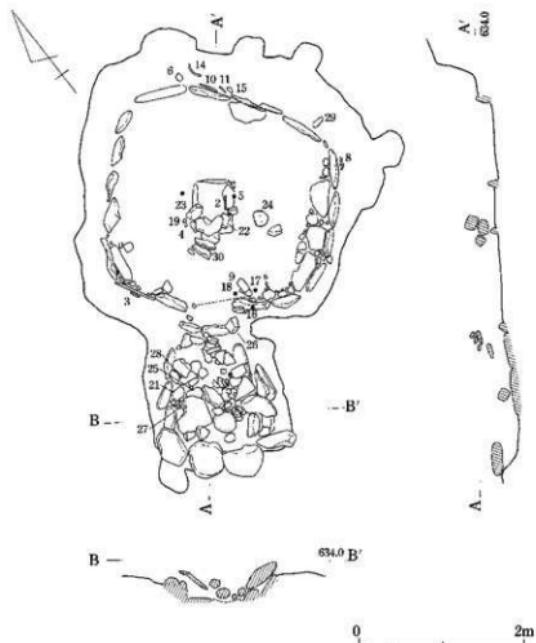
土器：大半は主体部の覆土上層と床面から出土している。覆土上層の土器は細片が多い。床面の土器は綠石や炉石に混じったものが多い。

1、壺甌。胴部の縦半分と底部が残る。広口甌。残存高32cm、胴部最大径39.5cm、底径11cm。胴上半部に沈線区画の縄文が渦巻状に施される。外面の胴上半部は黒く焼け、タール状の付着物が残る。胎土に白色砂粒を含む。色調は灰褐色土で焼成はやや悪い。2・3・10は、微隆起線区画の縄文が施された深鉢。2は炉内出上で、被熱のためか器面はざらつき施くなっている。胎土に白色砂粒を多く含む。色調は灰褐色で焼成は良い。4～9は、沈線区画の縄文が施された深鉢。4、口縁下に横位の沈線と微隆起線、円形刺突文がめぐる。5、口縁下に斜位の縄文を付けた微隆起線がめぐる。11、微隆起線区画内に斜位の短沈線。以上の土器は中期末に属し、11は曾利V式、他は加曾利E4式に比定される。

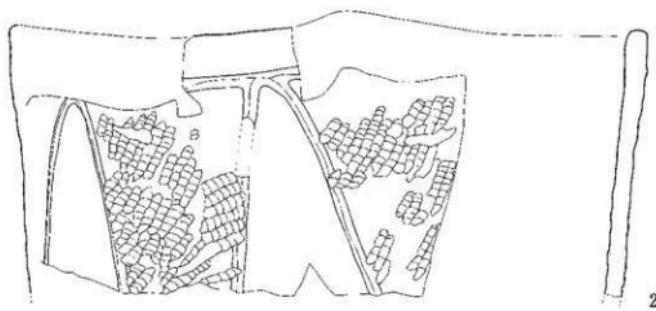
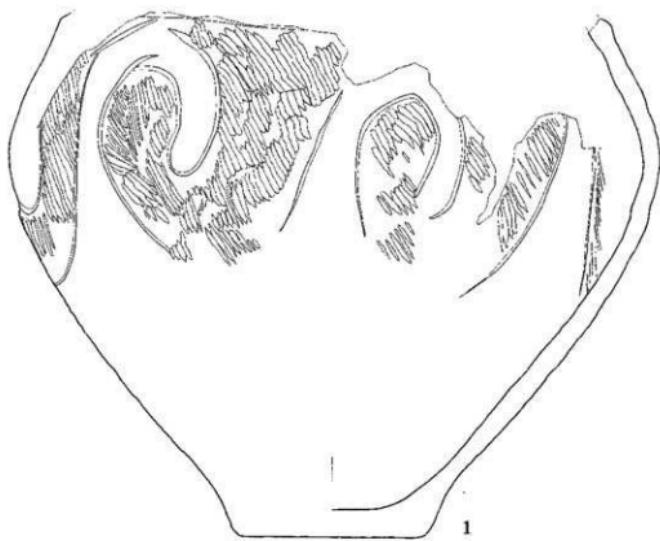
12～14は、太い沈線が施された深鉢で、後期の壺之内式に当たる。14は、主体部覆土上層の出土である。

15は、蓋状土製品で、主体部の縁石に混じって出土した。推定径10cm、残存高1.9cm。沈線が1条めぐり、端部には把手の剥落痕が残る。中期末に位置付けられよう。

石器：主体部床面と、集積された礫に混じって出土した。床面で、石鎚（16）、使用・加工痕のある剥片（17・18）、凹石（20・24）、磨製石斧（29）が出土した。炉直上の礫中から、礫器（19）、凹石（22・23）、柱状石器（30）が、張出し部の礫中からは凹石（21・25・28）、磨石（26）、石皿（27）が出土した。このうち30は、断面長方形で、各面に整形時の敲打痕が残り、とくに四隅には顕著である。

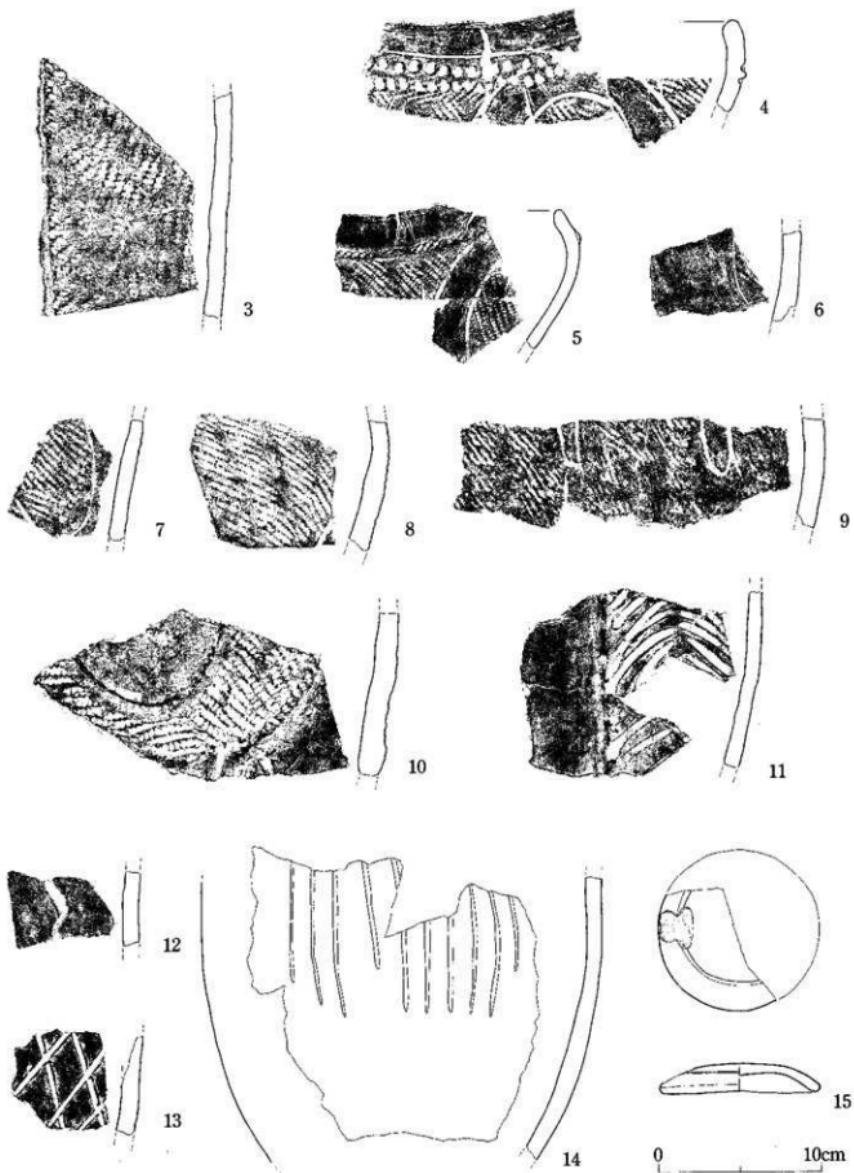


第8図 1号住居址 遺物分布

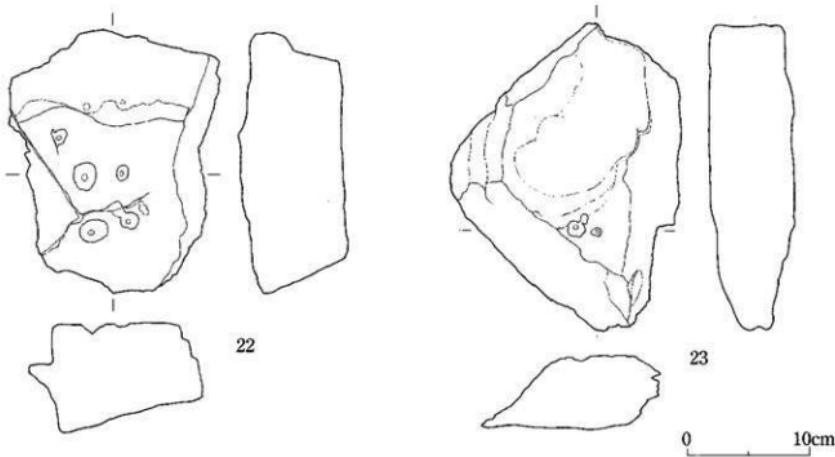
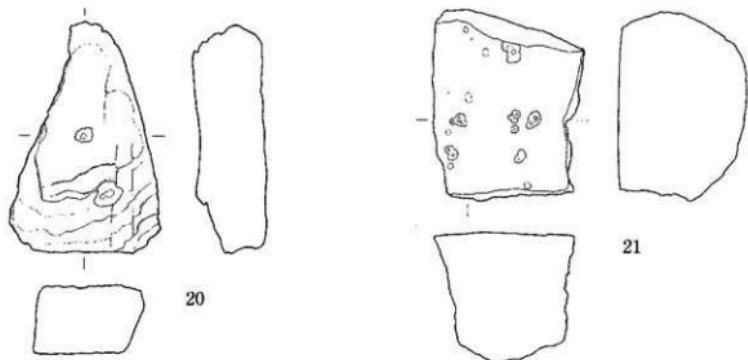
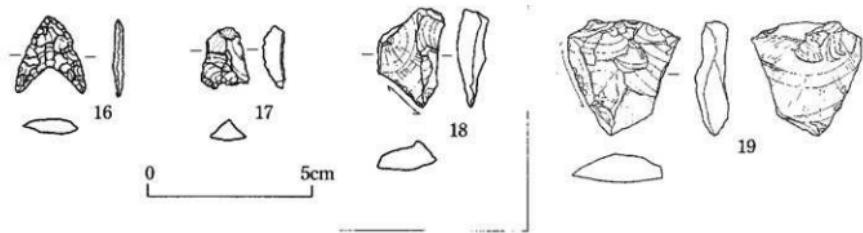


0 10cm

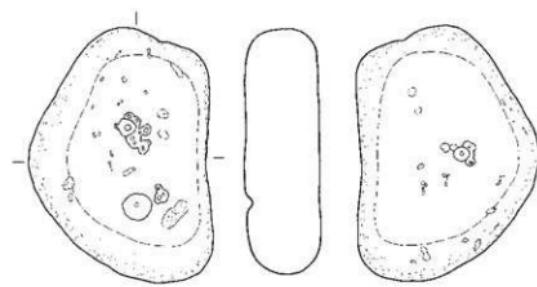
第9図 1号住居址 出土土器



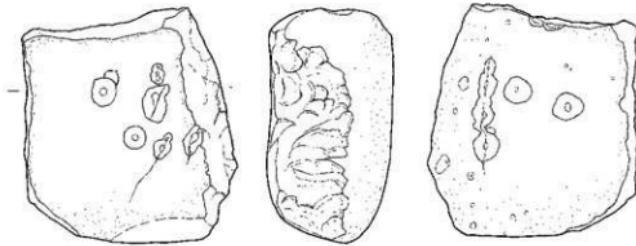
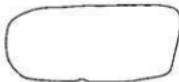
第10図 1号住居址出土土器・土製品



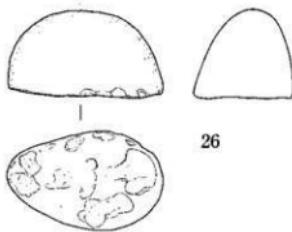
第11図 1号住居址 出土石器



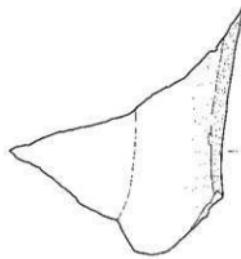
24



25



26

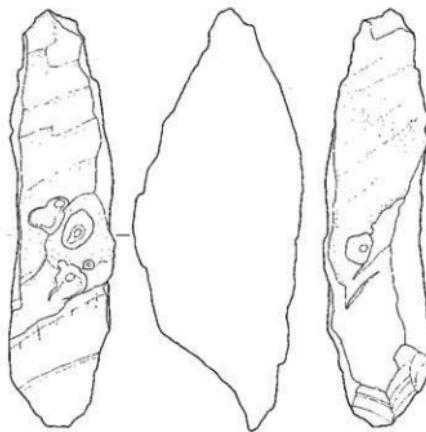


27

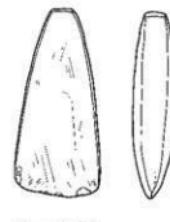


0 10cm

第12図 1号住居址 出土石器



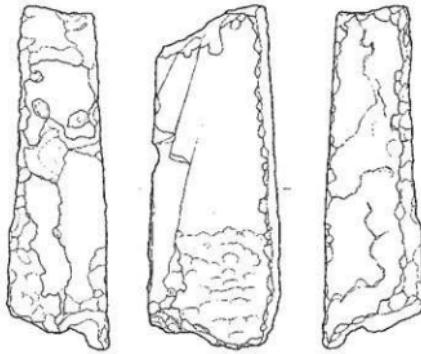
28



29

0

10cm



30



0 10cm

第13図 1号住居址 出土石器

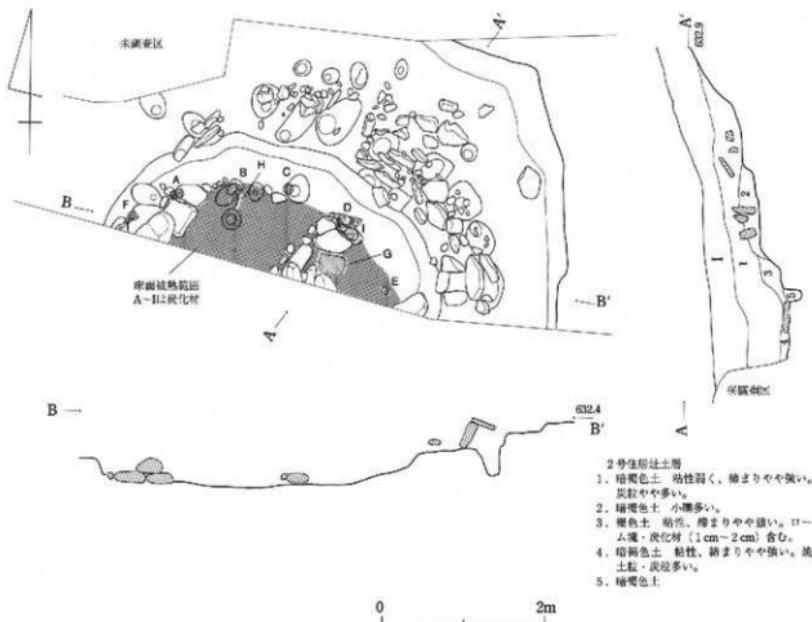
## 2号住居址（第14～17図・図版4～5）

**位置** H-8・9区。北西4mに3号住居址がある。確認面は表土直下の第IV層上面。

**形状・規模** 敷石住居址で、焼失家屋と思われる。南北が未調査区にかかり、調査範囲は主体部の北半分である。張出し部は未確認。主体部は、斜面下の西壁が存在しないため規模は不明だが、東西約7mの隅丸方形を呈するものと推定される。壁高は最高50cmで、緩やかに立ち上がる。壁から1.4m～2m内側の範囲は、床面より1段高くなっている。床面からの高さは20cm～30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

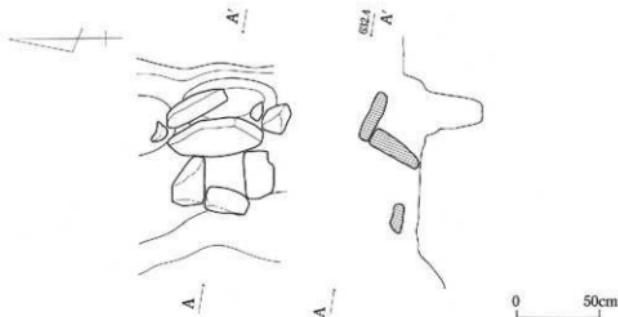
**床** 東西約4.3mの規模を持つ。貼り床が段部から50cm内側にあり、敷石面と同レベルまで暗褐色土を敷く。この床面上に焼土や炭化材が多量に検出され、注口土器や石器・被焼繰が散在していた。敷石は、西壁寄りと中央付近の2か所で巾約50cmの帯状に配される。西壁寄りの敷石端部には、貼り床の縁辺に小礫が並ぶ。

**柱穴** 床面と段部で確認された。床面では5基確認された。いずれも貼り床の縁辺に並び、ピットに対応して炭化材が検出された。すべて柱状で、とくにB・Dは縦に半蔵されたものであった。この他に板状の炭化材Gが検出された。炭化材はすべて床面や敷石に密着した状態で、樹種は「クリ」である。炭化材の樹種同定と年代測定の結果は付篇に示した。段部ではピット22基が確認された。このうちP2・3、9～15は、深さ40cm～50cmと規模が大きく主柱穴と見られる。これを取り巻くように外周するピット（P4～8）は、深さ10cm～30cmと比較的浅く小規模である。

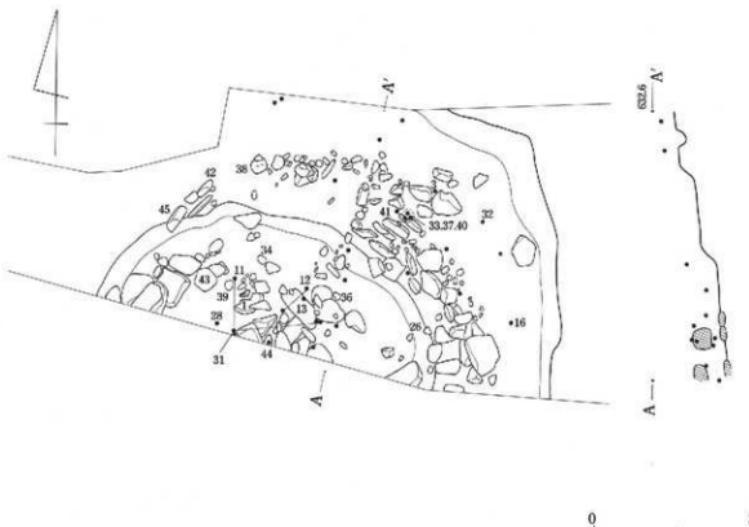


第14図 2号住居址

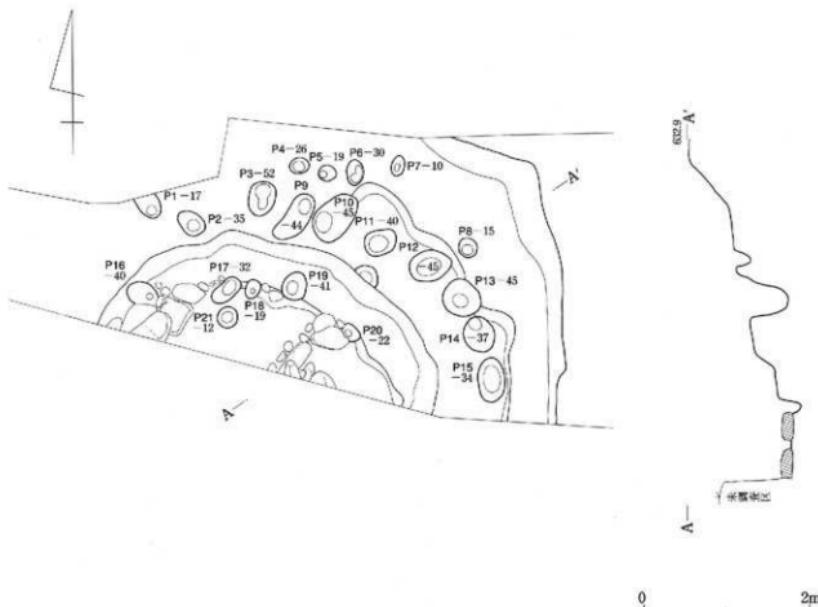
**礫帯** 段部の主柱穴状ピットに添うように、礫帯がめぐっていた。主にピット列を境にして内周と外周とに分けることができ、内周の礫帯は、段部底面に40cm程度の平石を2列程度に立て並べたものが、内外に倒れかけた状態であり、下部には小礫混じりの固い土が詰められていた。また、東側では直立した平石を一辺にして、内側に方形の配石が伴っている。一辺約60cmで、内部は暗褐色土の単層である。配石角には高さ30cmの立石が据えられていた。外周の礫帯は、主柱穴状ピットの外側に位置し、5cm~40cm大の礫が底面から10cm~30cm浮いた位置に乱雑に積まれていた。



第15図 2号住居址 配石



第16図 2号住居址 遺物分布



第17図 2号住居址 掘り方

炉 未確認。

埋甕 未確認。

覆土 4層に分けられ、炭粒を多く含む暗褐色土で占められる。とくに縄帯の内側には、縄帯が崩壊して流れ込んだものと思われる大小の甕が多く含まれている。

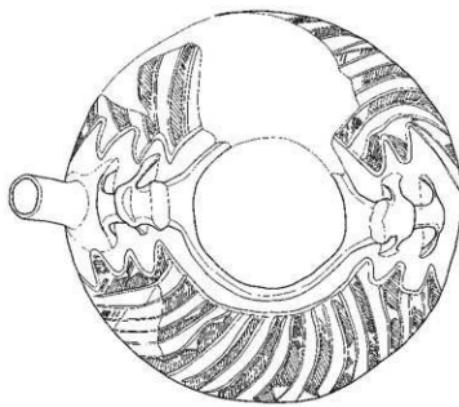
遺物 (第18~22図・図版15~16)

土器122点、石器13点がある。覆土・縄帯中・内周の縄帯直下、および被熱した床面で出土した。また、床や縄帯中の配石覆土の水洗選別を実施した結果、微細な炭化種実5点を検出した。その同定結果は付録に示した。

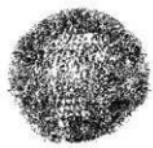
土器：大半は覆土中の出土で、細片である。床面の土器は注口土器（1）のみである。

1、注口土器。床面出土で、焼土にまみれた状態で1ヶ所につぶれていた。接合の結果、把手頂部と、体部から口縁部の一部を欠くが、ほぼ完全な形に復元できた。現存高21cm、口径9.4cm、胴部最大径24cm、底径8cm。双孔の橋状把手をもち、頂部はヘラ状になるものと思われる。体部上半に沈線区画の磨消繩文が斜位に施される。底部には継代痕が残る。外面は良く磨かれ、体部上半では光沢をもつ。胎土に赤色・白色砂粒を含む。色調は赤褐色を呈するが、破片によっては黒く煤けた部分がある。焼成は良い。堀之内2式に比定される。

2~31は、覆土中の出土である。2、表裏に繩文が施され、裏面の繩文は羽状となる。草創期に比定され、本遺跡では最古に位置付けられる。3、方形区画内に連続刺突文が加えられた中期中葉の土器。4~6は中期後葉から末葉。7は後期初頭の称名寺1式にあたる。8~28は後期前葉の掘之内式にあたり、この時期の土器



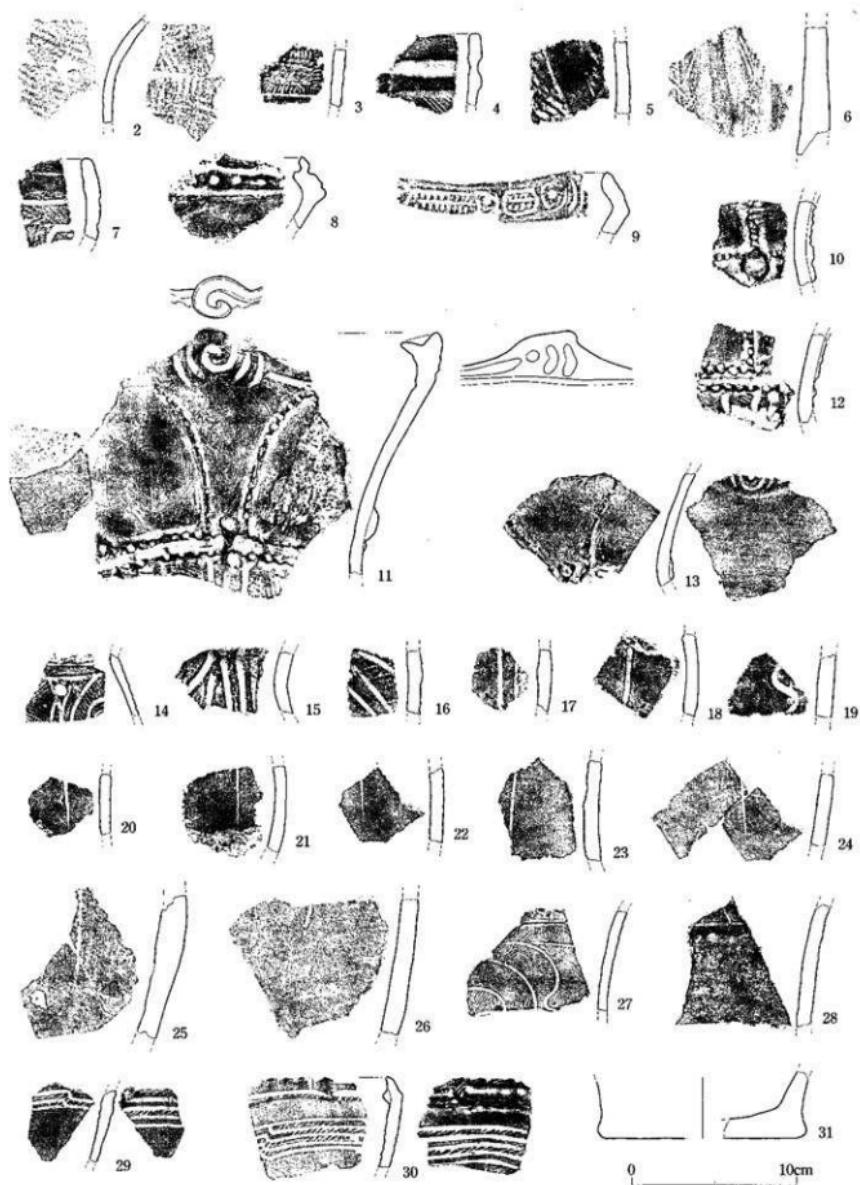
1



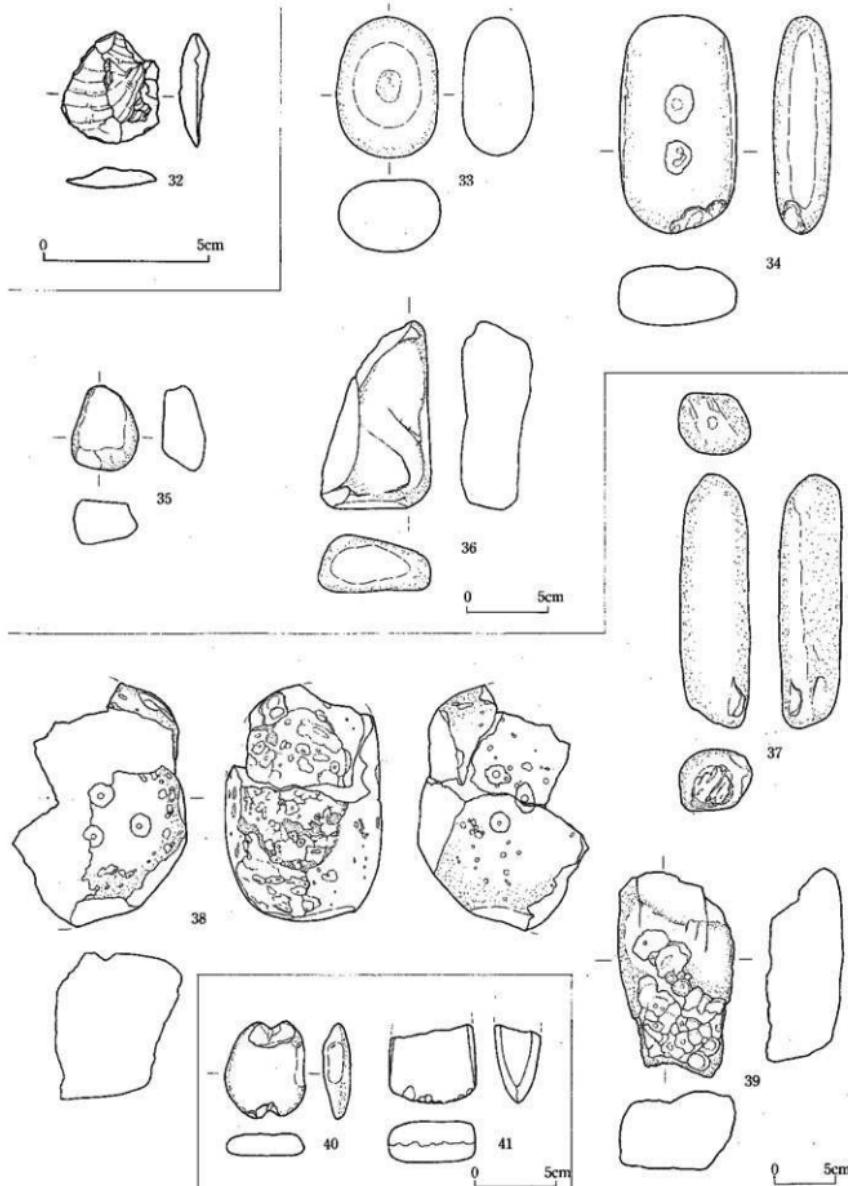
0 10cm

A scale bar at the bottom right indicating a length of 10 cm.

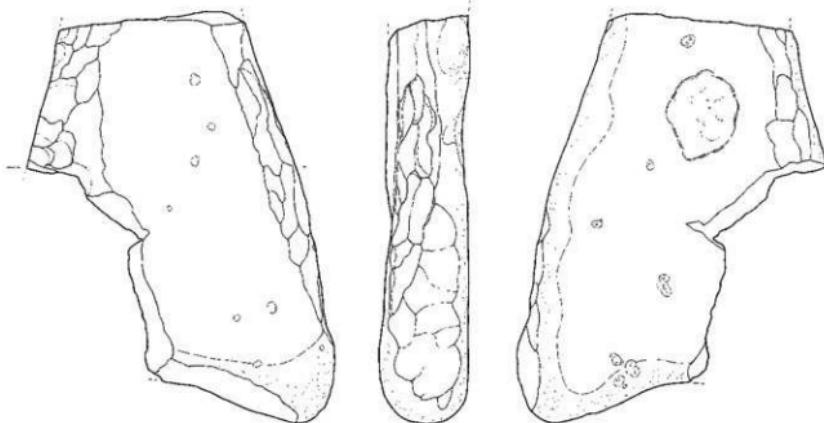
第18図 2号住居址 出土土器



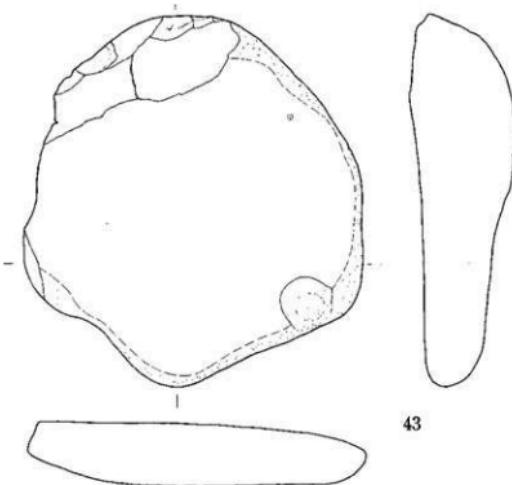
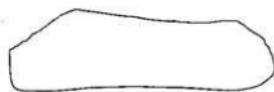
第19圖 2号住居址 出土土器



第20図 2号住居址 出土石器



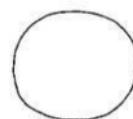
42



43



44



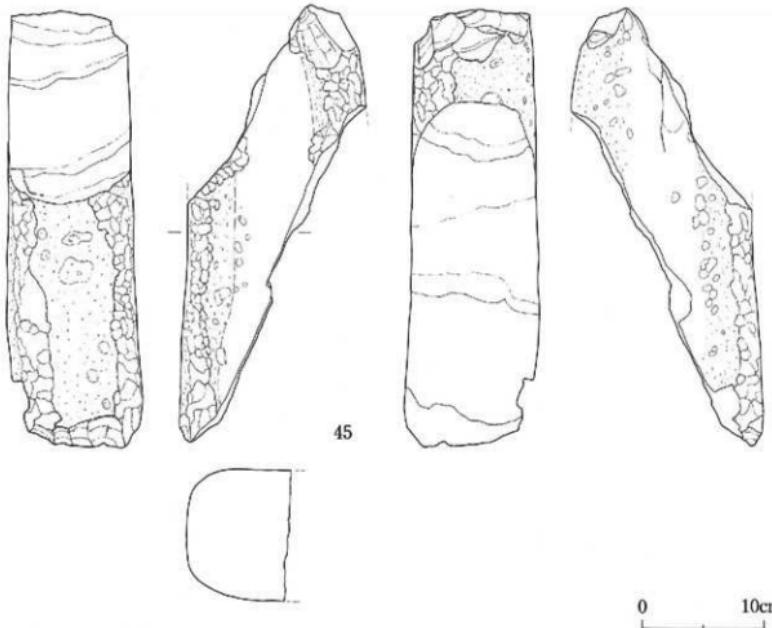
0 10cm

第21図 2号住居址 出土石器

が本遺構で最も多い。9、内折した口縁上端に沈線や円形の刺突文が施される。10~13、刻みをえた隆帶や8字状の貼付文が付く。14~16、縄文地に弧状や斜位の沈線が施される。17~26、沈線文が主体となる深鉢。27~28は直線的に開く深鉢で、磨消縄文(27)と沈線文(28)がある。

29~30は、後期中葉の加曾利B1式にあたる。胴上半の内外面に数条の沈線が巡り、外面は地文に縄文、内面は斜位の刻みがそれぞれ施される。また外面の各沈線の一端は縦に屈折する。30の口縁は内折する。口唇部は一部で細かく波状を呈し、その他には細かな刻みが入る。口縁に一条の沈線と斜位の刻みが巡り、内面に断面三角形の隆帶と米粒状の刺突文、斜位の刻みが入った貼付文が施される。器面は良く磨かれて光沢がある。

石器：床面で磨石(34)・台石(39)が出土した。内周の縄帶直下では、磨石(33)・叩き石(37)・石錐(40)・磨製石斧(41)の4点がまとまって出土した。他は覆土や縄帶中からの出土が多い。外周の縄帶に混じって凹石(38)が出土した。側面の一端には磨滅した敲打痕が多数認められる。内周の縄帶からは、石皿(42)・柱状石器(45)が出土した。45は、断面隅丸長方形で、四隅に整形時の敲打痕が多数残る。一面に磨面が残る。スクレイバー(32)は、第V層中の床面精査時に出土したもので、時期は古くなるものと思われる。



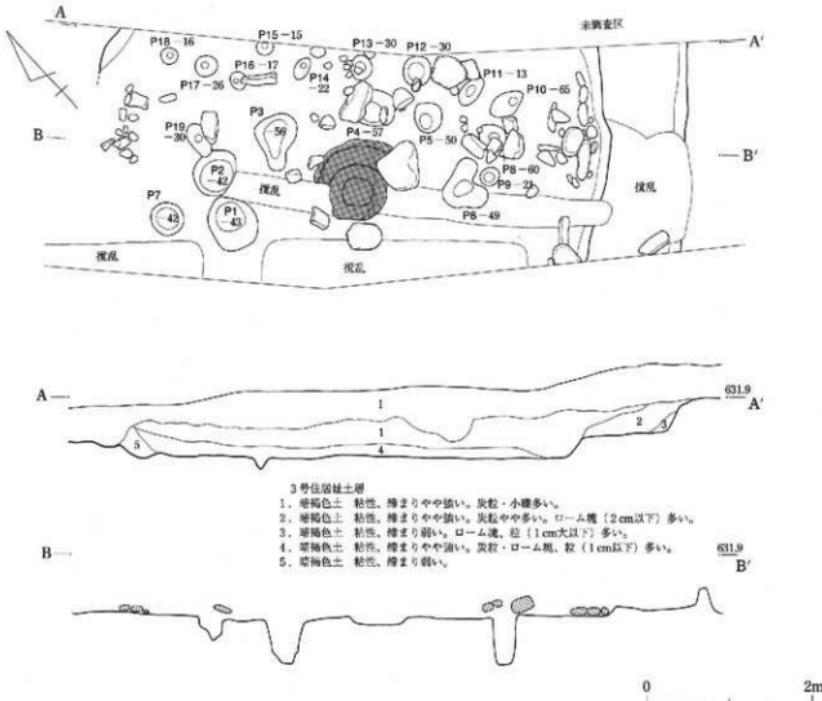
第22図 2号住居址 出土石器

### 3号住居址（第23～25図・図版6）

**位置** F-7・8区。確認面は、表土直下の第V層上面。遺構は耕作溝などで搅乱され、遺存状態は悪い。

**形態・規模** 敷石住居址。東西が未調査区にかかる。主体部は、斜面下方の壁が存在しないため規模は不明だが、東西約8mの方形を基調とした平面と推定される。壁高は約40cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。東壁から1m内側の範囲は、床面より1段高くなっている。床面からの高さは20cm～30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。張出し部は未確認である。

**床** 床面は第V層中に構築され、東西約6.5mの規模を持つ。ローム粒や炭粒を含む暗褐色土を約10cmの厚さで敷き床面とする。床面は平坦で、硬化面は認められなかった。床面には40cm～60cm大の平石や20cm以下の大礫が散在する。壁際に縁石が残り、約10cm大の躰や20cm～50cm大の細長い躰、石棒が用いられている。



第23図 3号住居址

**柱穴** ピットは19基確認された。このうち、炉の周開を方形に廻るピットは、深さ42cm～65cmで比較的規模が大きい（P 1～8・10）。さらに外周をめぐるピットは深さ13cm～30cmで比較的浅く規模が小さい。

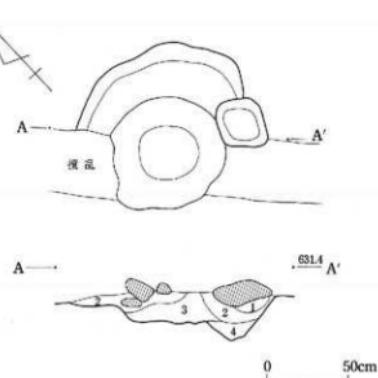
**炉** 主体部中央付近に位置する。炉石ではなく、現状は地床炉である。耕作溝などで搅乱され遺存状況は悪い。掘り方は直径約1.2mの円形を基準とした平面と推定される。中央部に一段深い掘り込みがあり、最深20cmである。覆土は2層に分けられ、下層は焼土である。

**埋甕** 未確認。

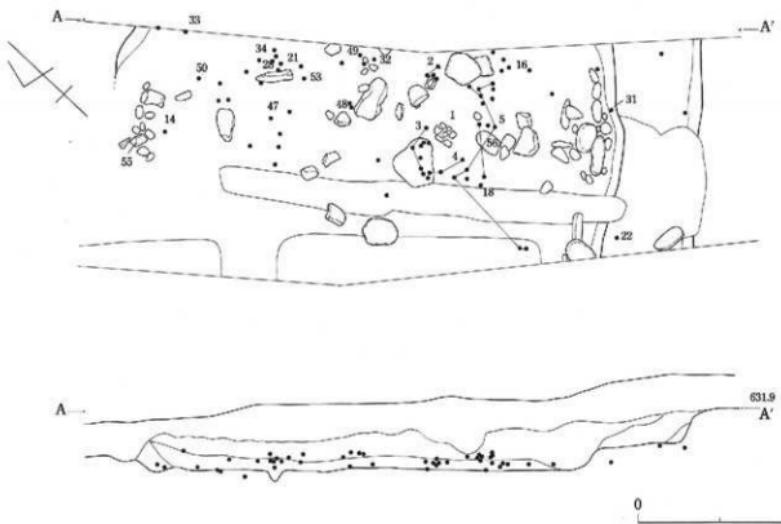
**覆土** 4層に分けられる。大半は炭粒を多く含む暗褐色土で占められている。

**遺物** (第26～29図・図版17～18)

土器250点、石器3点がある。大半が覆土下層から床面で出土し、段部では覆土中から数点が出土した程度である。細片が多く、炉の東側で接合資料が目立つ。



第24図 3号住居址 炉



第25図 3号住居址 遺物分布

土器：1～11は、炉東側の床面で出土した。

1、無文深鉢。口唇部は平坦で一部に刻みが入る。口縁内面には一条の沈線が巡る。胴部外面にケズリ痕が見られる。胎土に石英、白色砂粒を含む。色調は赤褐色だが、外面の一部は黒く煤けてタール状の付着物が残る。焼成は良い。

2は、無文深鉢の胴部である。外面にケズリ痕が見られる。胎土に石英、白色砂粒、黒色雲母を含む。色調は赤褐色だが、内外面の一部は黒く煤けてタール状の付着物が残る。焼成は良い。

3は、波状口縁の深鉢で、口縁は内折する。口縁に一条の沈線と細かな刻目がめぐり、波頂部には円形刺突文を持つ把手が付く。胴上部には二本の磨消繩文が配される。胎土に石英、黒・金雲母、白色砂粒を含む。色調は黄褐色で、外面は黒く煤けている。焼成は悪い。

4は、浅鉢で口縁は内折する。口唇部に細かな刻みが入る。口縁は、外面に一条の沈線と細かな刻目、内面に断面三角形の隆帯がそれぞれめぐらされる。さらに、内面の上半部には四条の沈線がめぐり、沈線間に刻みが入る。また「8」字状の沈線で区切られる。外面の一部にはタール状の付着物が残る。胎土に白色砂粒を含む。色調は褐色で、焼成はやや悪い。

5～11は、同一個体の鉢である。口縁上端が外研ぎ状となる。口唇部は一部に刻みが加えられ、細かく波状を呈する。外面には、五条の沈線が無文帶を挟んで2段に配され、各沈線間は「8」字状の沈線で区切られる。無文帶も曲線的な沈線で区切られる。内面は、口縁下に六条の沈線が巡る。胎土に石英、赤色・白色砂粒を含む。色調は赤褐色で、焼成は良い。

以上の土器は、後期の加曾利B1式に比定される。

16～23・25～28は、頭部が強くくびれ、丸くふくらむ胴部に主文様が施される深鉢と思われる。口縁部は、無文（16）、上部に沈線を施すもの（17・18・20）がある。胴部には曲線的な沈線文が配され、このうち25～28は繩文を地文としている。頭部には横位沈線の他に、刻み目を持つ隆帯（19）や環状・8字状の貼付文（21・22）が付く。

24は、緩くくびれた頭部に隆帯と沈線が巡り、下位には繩文地に沈線が施される。29・30、緩くくびれた胴部に縦位の沈線が施される。

31～34・36～44は、口縁部が直線的に開く深鉢で、磨消繩文が施される。口縁上部には刻み目の入った隆帯（34）や8字状の貼付文が付く。

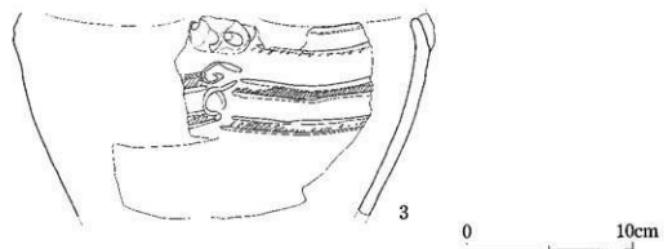
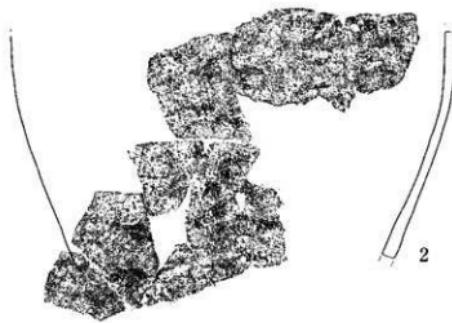
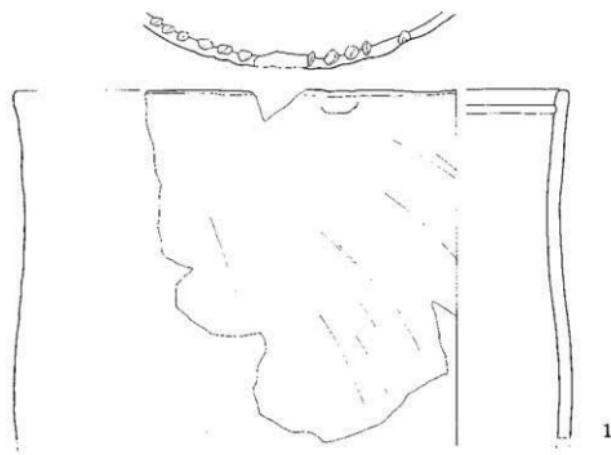
45～50、沈線による格子目文が施される。

35・51は注口土器で、胴上部に磨消繩文（35）、微隆起線（51）が施される。

52・53は底部。52は繩文が施され、胎土に石英、白色砂粒、黒色雲母を多く含む。53は網代痕をもつ。

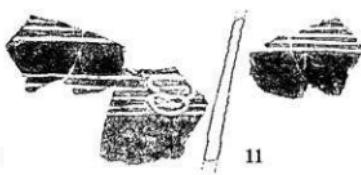
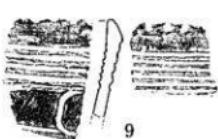
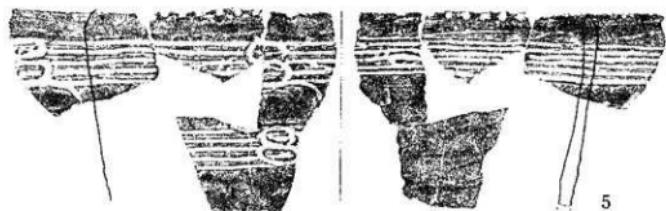
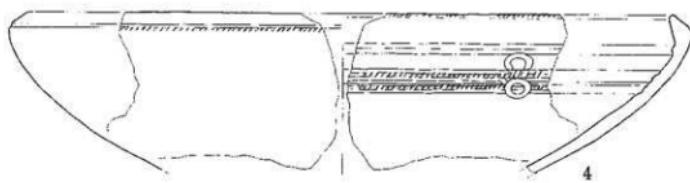
以上の土器は、12～14は中期後葉、15は後期の称名寺末、16～53は後期で、大半が堀之内式に比定される。

石器：出土数は土器に比べて極端に少ない。いずれも床面の出土である。54は磨製石斧。55は石棒で縁石に転用されていた。56は石皿で、ピット（P 8）に落ちこむような状態で出土した。

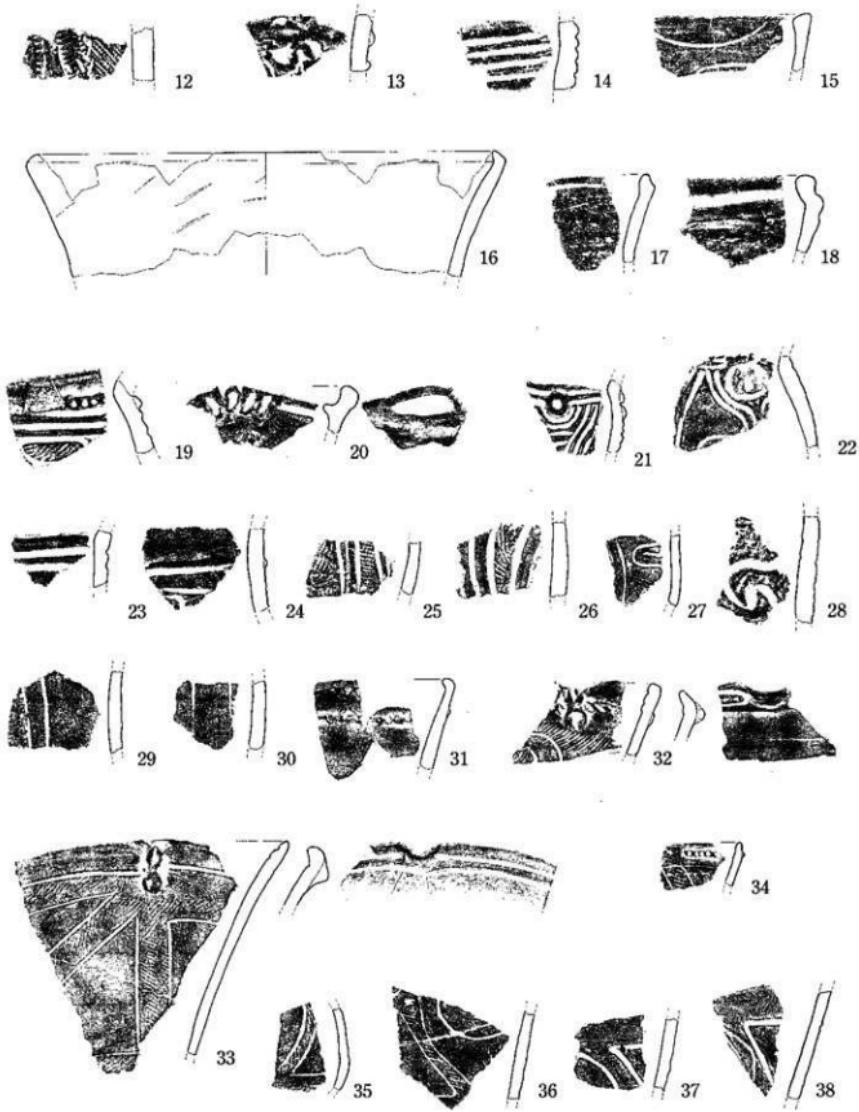


0 10cm

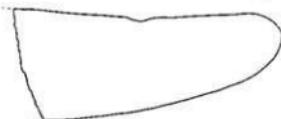
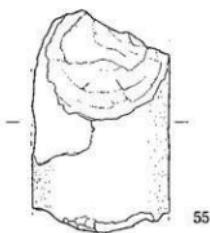
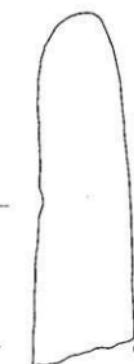
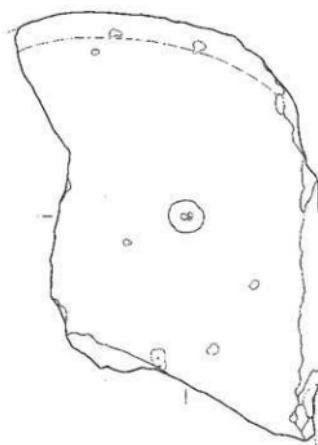
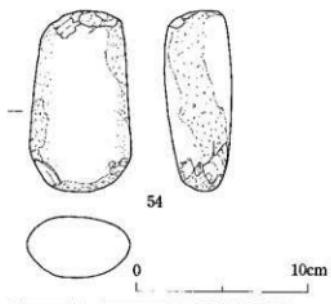
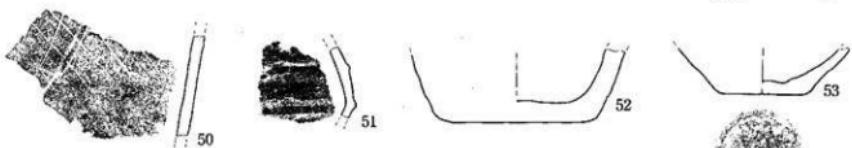
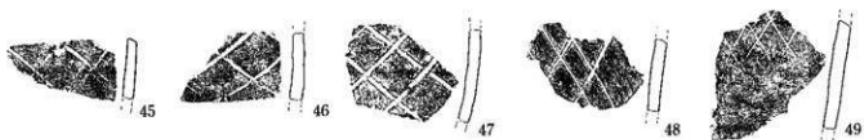
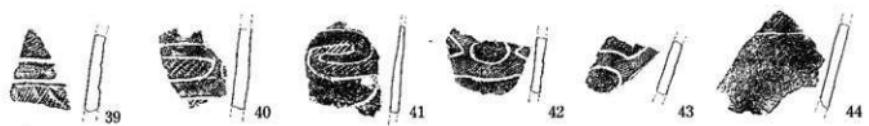
第26図 3号住居址 出土土器



第27圖 3号住居址 出土土器



第28図 3号住居址 出土土器



第29図 3号住居址出土土器・石器

## (2) 穴住居址

### 4号住居址（第30図・図版7）

**位置** D・E-5区。北側に1号配石がある。確認面は第V層上面。掘り込み面は第III層上面である。南側は搅乱を受けている。

**形状・規模** 穴住居址。大半が未調査区にかかる。床面のピットを検出した段階で穴の存在を確認した。このため明確な平面形は不明だが、床面の範囲から方形を基調としていたものと推定される。規模は不明。

**床面・壁** 床面は第V層中に構築され、平坦である。壁は、土層断面で高さ約40cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

**柱穴** ピット3基が確認された。このうち、P2の底面には20cm~30cmの大の礫5点が敷かれていた。

### 炉 未確認。

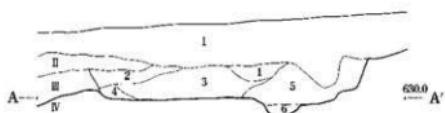
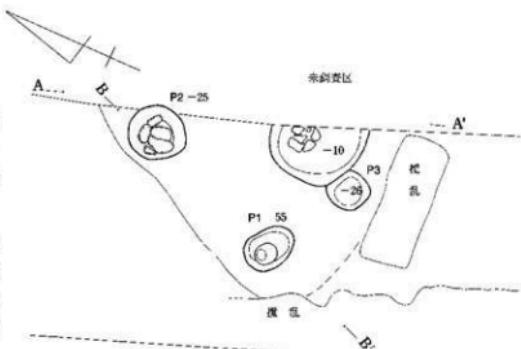
**埋設土器** 南北1.2m、深さ10cmの平面円形の掘り込みがあり、この底面に深鉢土器（1）が埋設されていた。土器は口縁を上にした正位であった。また、別個体の深鉢底部（2）が伴う。

### 覆土 5層に分けられる。

### 遺物（第31図・図版18）

埋設土器のみである。1、深鉢。口縁部から胸部の1/2が残る。口縁部の推定径37cm。縄文地に波状沈線、口縁部に列点。胎土に黒・金雲母、石英粒を含む。色調は赤褐色~黒褐色で、焼成は良い。2、深鉢底部。燃糸文。

以上の土器は、曾利Ⅲ~Ⅳ式期に比定されよう。



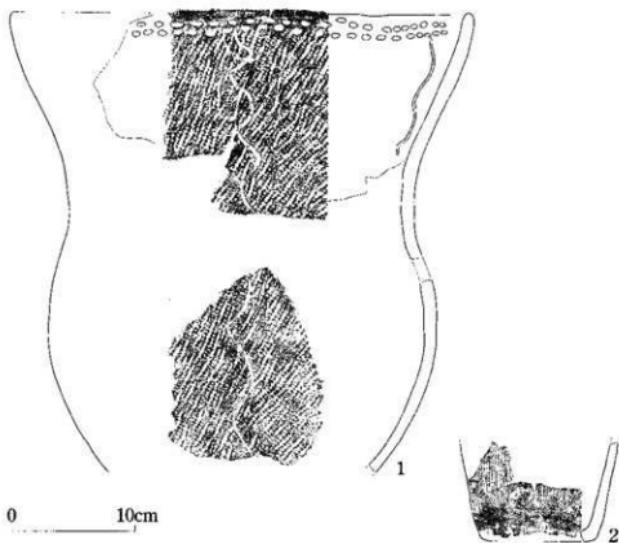
#### 4号住居址土層

1. 桃色土 粘性、被まり弱い。小礫多い。
2. 線繩急土 粘性強く、被まりやや弱い。小礫や多い。
3. 線繩急土 粘性強く、被まりやや弱い。小礫・礫（2cm）多い。
4. 同繩急土 粘性強く、被まりやや弱い。小礫多い。褐色土壤を含む。
5. 桃色土 粘性、被まり弱い。底板・小礫・礫（2cm）多い。黄褐色・暗褐色土層を含む。
6. 黑灰土層厚土



0 2m

第30図 4号住居址



第31図 4号住居址 出土土器

5号住居址（第32～33図・図版7）

位置 C・D-3区。確認面は第Ⅲ層中である。

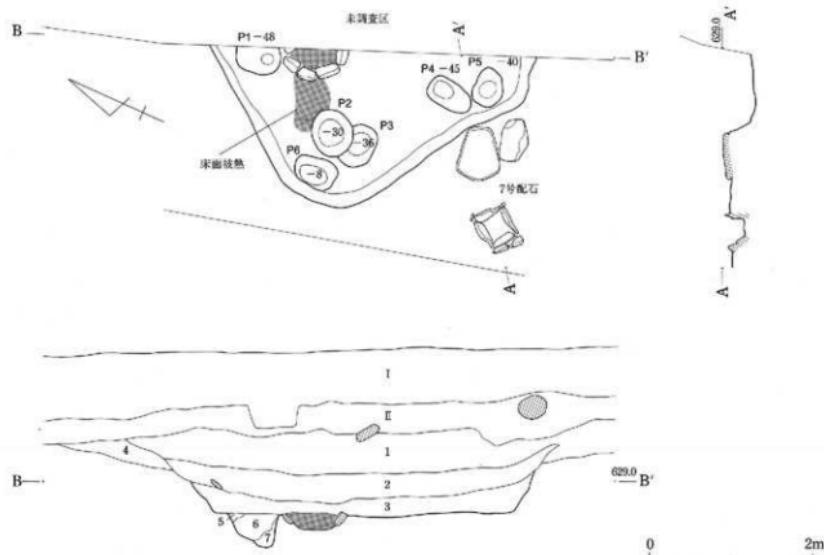
形状・規模 壓穴住居址。東側が未調査区にかかっている。平面は一辺3.5mの隅丸方形と推定される。

床面・壁 床面は第Ⅲ層中に構築され、平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高30cmを検出したが、土層断面の観察ではさらに緩やかに立ち上がりながら壁高約80cmまで確認できた。

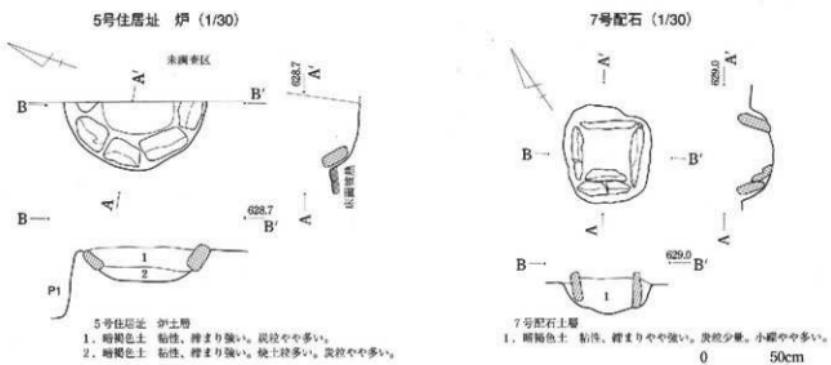
柱穴 床面でピット6基を検出した。P 1・3の覆土上にハードローム塊が多量に含まれる。

炉 西壁寄りに位置する。石囲い炉で、平石を斜めに立てて円形に組んでいる。掘り方は南北80cmの不整形で、最深20cmである。覆土は2層に分けられ、下層に焼土粒が多く含まれる。なお、炉とP 2の間の床が焼けて硬化している。

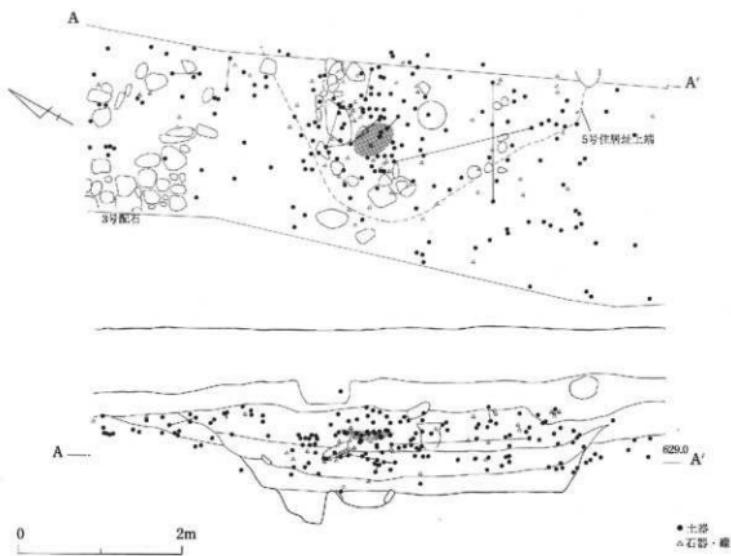
覆土 4層に分けられ、全般に炭粒を多く含む。第1層から第2層は細粒の橙色スコリアを多く含み、とくに第2層はスコリア質と呼べるほど含有量が多く、床面を覆う第3層とは明瞭に区別できる。また、第1層中に1号埋設土器と1号焼土址、第2層中に6号配石が検出されており、5号住居址の埋没過程で生じた凹地を利用して、複数の遺構が構築された状況がうかがえる。



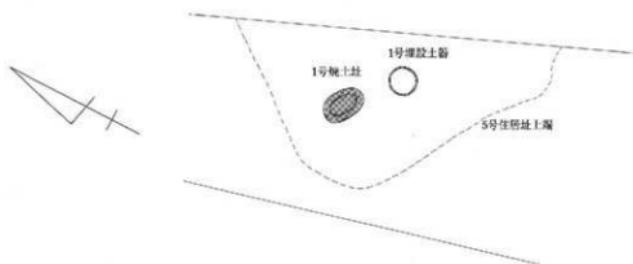
- 5号住居址土層
1. 黒褐色土 粘性弱く、締まり強い。橙色スコリア (1mm~2mm)・漂 (2cm以下)・炭粒多い。
  2. 黒褐色土 粘性弱く、締まり強い。橙色スコリア (1mm~2mm) を非常に多く含む。漂 (2cm以下)・炭粒多い。
  3. 黒褐色土 粘性、締まりやや強い。炭粒・小礫多い。
  4. 黑褐色土 1と第Ⅲ層の混合層。
  5. 黑褐色土 (P1覆土)
  6. 黄褐色土 (P1覆土) ローム塊多い。
  7. にぶい黄褐色土 (P1覆土) 締まり弱い。ローム塊多い。



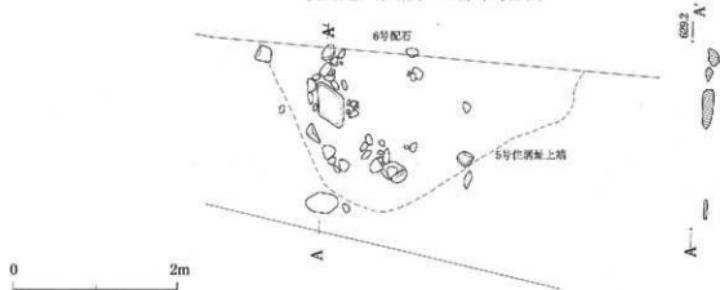
第32図 5号住居址、7号配石



▼5号住居址 第1層中の遺構



▼5号住居址 第2層中の遺構 (6号配石)

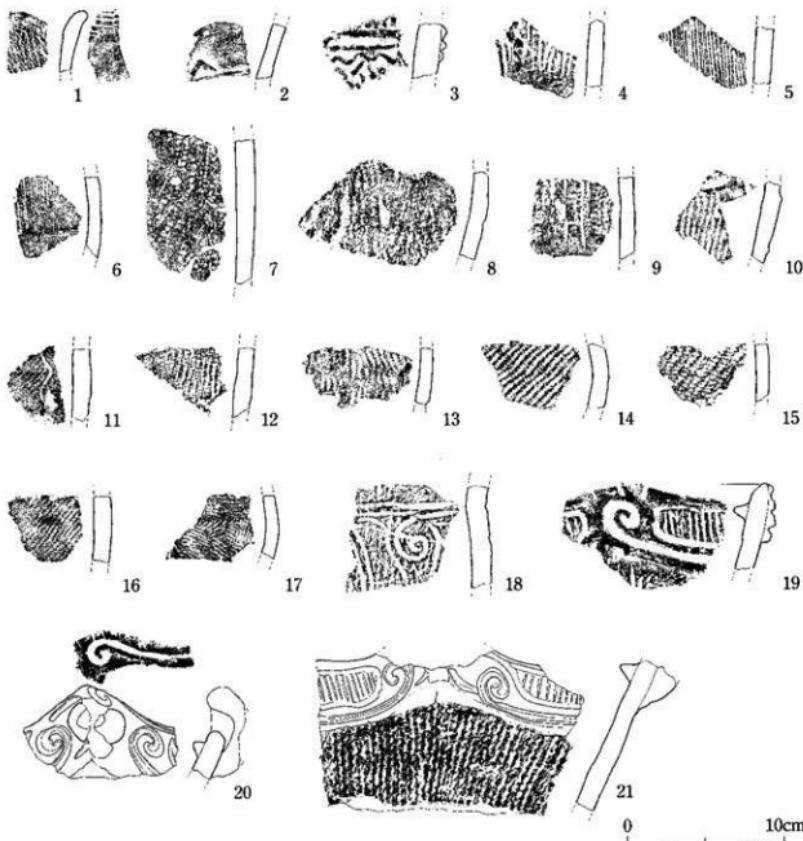


第33図 5号住居址覆土中の遺物・遺構分布、6号配石

遺物（第34図・図版19）すべて覆土中の出土である。第1層から第2層にかけて多く出土し、第3層中は比較的少ない。このうち、第3層中の遺物を本住居址の出土遺物として扱うこととする。遺物は土器のみで、石器は出土していない。

土器：1、表裏に縄文が施され、裏面の縄文は口縁上部にのみ施される。2～4、波状隆帯が付され、4～6は条線を地文とする。7～16、縄文を地文とする。このうち8・9には低平な隆帯が付き、10・11には弧状や波状の沈線が施される。17は沈線区画の縄文。18～21は粗い撚糸文を地文とし、胎土は同質で金雲母や石英を多く含む。18、颈部以下に渦巻状の沈線が施される。19～21、波状口縁の深鉢で、口縁内側に断面三角形の隆帯がめぐる。口縁部は隆帯で区画され、短沈線が施される。20に双孔の把手が付く。

以上の土器は、1は草創期、2～16・18～21は中期の曾利Ⅱ～Ⅲ式期、17は加曾利E 4式に比定される。



第34図 5号住居址 出土土器

### (3) 埋設土器

#### 1号埋設土器 (第35~36図・図版8・19)

D-3区。確認面は5号住居址の覆土上層中で、近接して1号焼土址がある。底部欠損の深鉢土器が、口縁部を上にした正位で埋設されていた。掘り方は土器と同一の規模である。内部の覆土は3層に分けられ、底部は下層から出土している。また、中層から別個体の比較的大きい土器片(2)が出土し、下面には炭化物が多く付着していた。

1、深鉢。器高40cm、口径31cm、底径8.5cm。胴下半部で少量の破片が欠損するが、ほぼ完形。口縁部に沈線がめぐり、側部には沈線による匂字状区画が6単位配され、それぞれ刺先状の文様が伴う。また、胴下半部には刺先状の文様に対向して匂字状文が配される。外面の胴中位には黒く煤けた範囲が帯状にめぐる。内面は横位の磨きが丁寧に施されるが、下半部は黒く煤けて器面の剥落が目立つ。胎土に石英を含む。色調はにぶい赤褐色で、焼成は良い。称名寺2式に比定される。

2、深鉢口縁。沈線区画の縄文が施され、口縁には隆帯がめぐる。加曾利E4式に比定される。

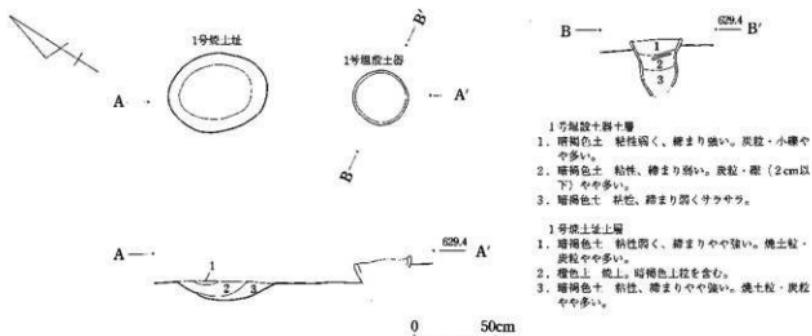
### (4) 焼土址

#### 1号焼土址 (第35図)

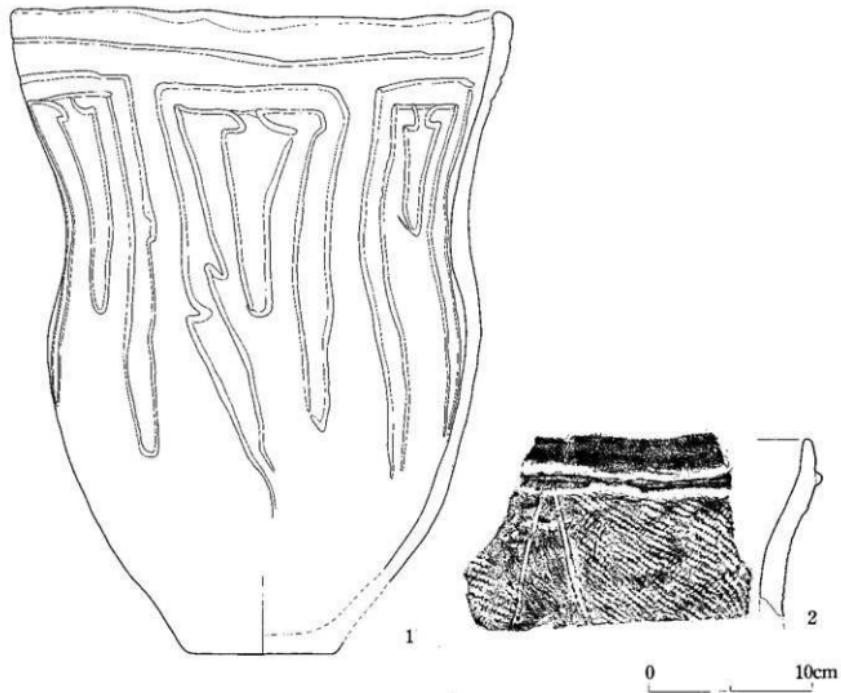
D-3区。確認面は5号住居址の覆土上層中で、1号埋設土器から北50cmに位置する。確認面は1号埋設土器と同一である。掘り込みは長軸60cm、短軸50cmの楕円形。深さ約20cmで、断面は皿状を呈する。覆土は3層に分けられ、中層に焼土が堆積する。

遺物は、覆土中から土器(2)と黒縞石製の石鏃(1)が出土している(第37図・図版19)。

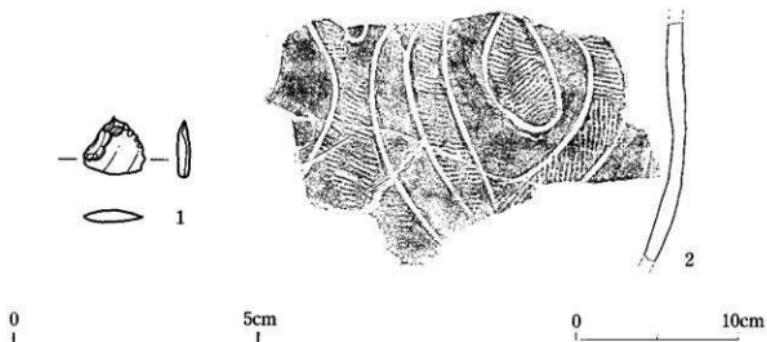
2、深鉢胴部。遺構外との接合資料で、周囲からの流れ込みである可能性が高い。沈線区画の縄文帯が曲線的に配される。称名寺1式に比定。



第35図 1号埋設土器、1号焼土址



第36図 1号埋設土器 出土土器



第37図 1号焼土址 出土土器・石器

## (5) 配石

### 1号配石（第38図・図版8）

D-4・5区。確認面は第Ⅱ層中。東側は未調査区にかかる。3m×2mの範囲内に、40cm～60cm大の礫5個が散在する。いずれも斜面下方に傾斜している。礫に被熱痕はない。他に遺物はない。

### 2号配石（第38図・図版9）

D-4区。北2mに6号配石がある。確認面は第Ⅲ層中。東側は水道管が通っていたため、巾1mの未調査範囲がある。

本遺構は敷石住居址の可能性がある。直径約3mの円形の範囲内に10cm～40cm大の礫が散在し、円周上に縁石が立てられ、その内側に同規模の平石が付随する。

この配石には豎穴が存在していたことが、土層断面の観察から確認された。豎穴の平面形は不明確だが、縁石と壁の位置が一致することから、配石の範囲とはほぼ同一と推定される。壁高は35cmで、床は第Ⅲ層中に構築されほぼ水平である。豎穴の覆土は2層に分けられる。

炉や柱穴などは未確認である。

遺物は、床面付近から土器4点、石器2点が出土している（第39図・図版21）。1は口縁下に隆帯がめぐる。2は胴部に微隆起線、3は無文の胴部、4は沈線区画の繩文である。加曾利E4式に比定される。5は石皿、6は凹石である。

### 3号配石（第38図・図版9）

C-2・3区。北2.5mに5号配石、南2mに6号配石がある。確認面は第Ⅲ層上面。一部未調査区にかかる。長軸2m、短軸1mの台形状平面の範囲内に敷石される。礫は20cm～30cm大が多い。平滑面を上にして敷かれているが、その上面レベルは描わず、やや凹凸がある。礫に被熱痕はない。

遺物は礫に混じって土製円盤（1）、土器（2）が出土したのみである（第40図・図版20）。いずれも後期の掘之内式に比定される。1は土製円盤。沈線文をもつ胴部片を用い、周縁を打ち欠いて円形に仕上げている。2は深鉢口縁で、内折する口唇部に太い沈線がめぐる。頸部に沈線が見られる。

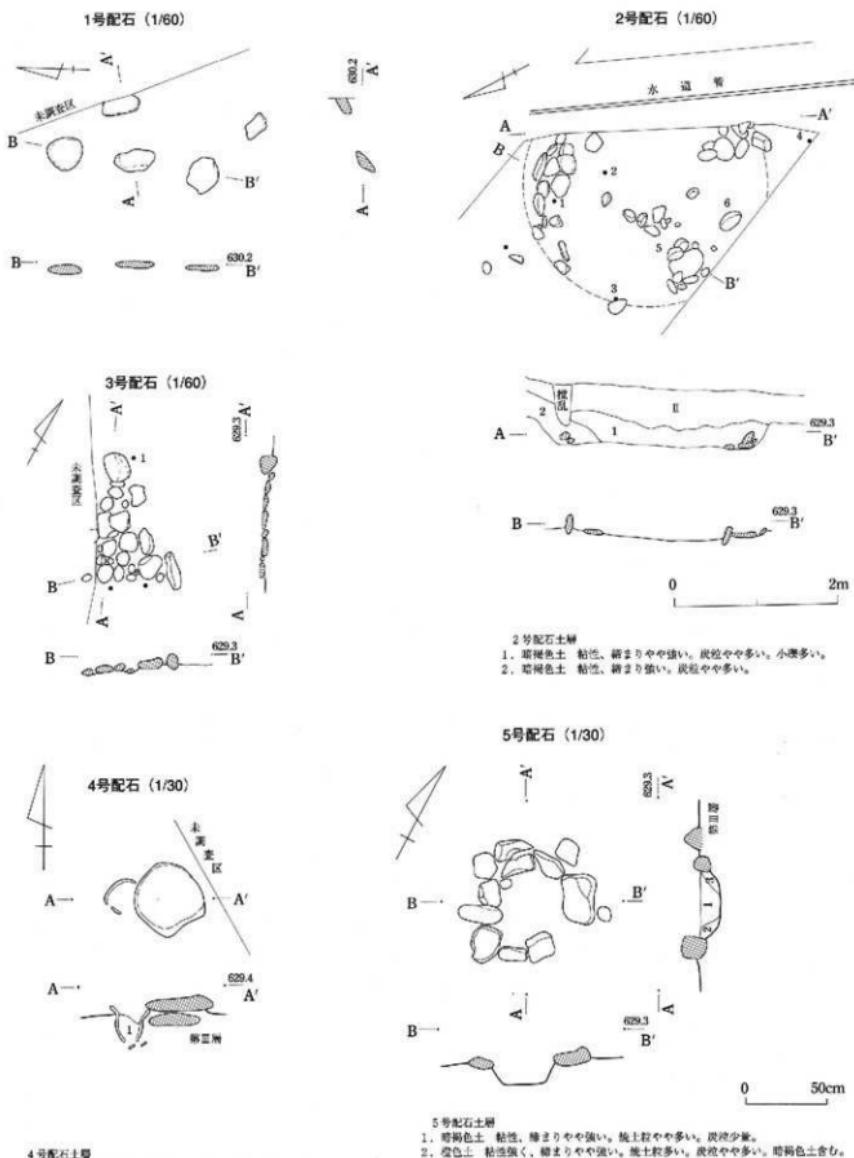
### 4号配石（第38図・図版10）

C-1区、南3mに5号配石がある。確認面は第Ⅲ層上面。半石2枚が積まれ、西側に接して深鉢土器（1）が埋設されていた。土器は正位で、底部と口縁部の一部を欠く。礫に被熱痕はない。

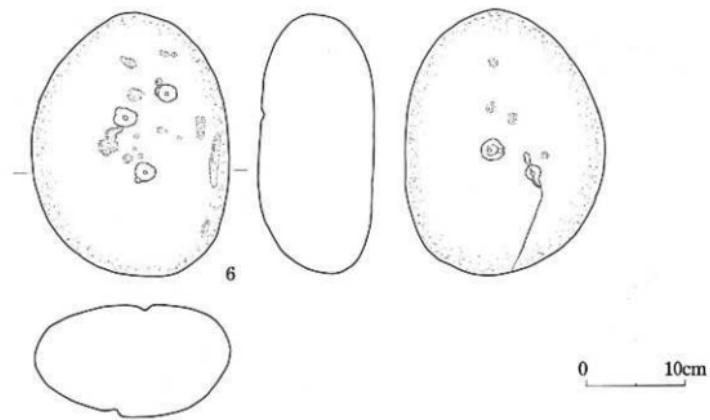
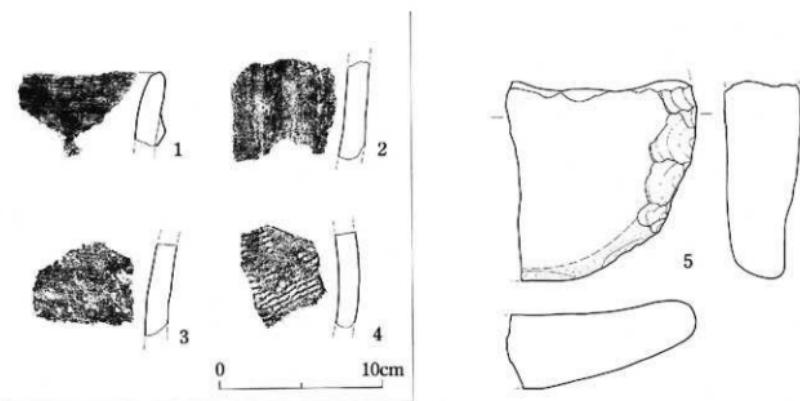
遺物は埋設土器のみである（第41図・図版20）。1、深鉢。現存高23.5cm、推定口径21cm。底部、および口縁の一部を欠損する。波状口縁で、波頂部に刻みが加えられる。口縁部と胴部に沈線文が配される。胴下半部外側は剥落が目立つ。胎土に石英を含む。色調はにぶい赤褐色土で、焼成はやや悪い。称名寺2式に比定される。

### 5号配石（第38図・図版10）

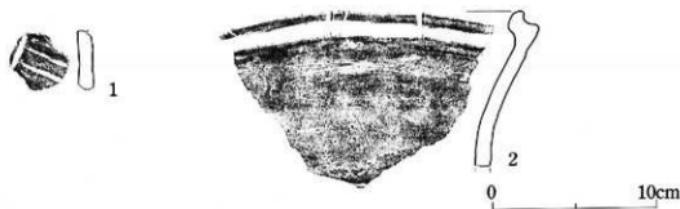
C-2区。北3mに4号配石、南2.5mに3号配石がある。確認面は第Ⅲ層上面。礫が一辺約75cmの方形気味に配される。内部は深さ15cmに掘り込まれ、焼土が堆積する。礫に被熱痕はない。遺物は、配石の角に用いられていた凹石1点のみである（第42図・図版21）。



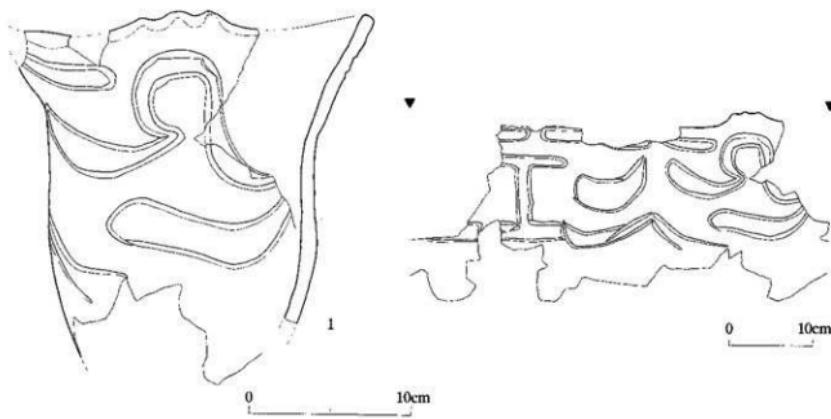
第38図 1号～5号配石



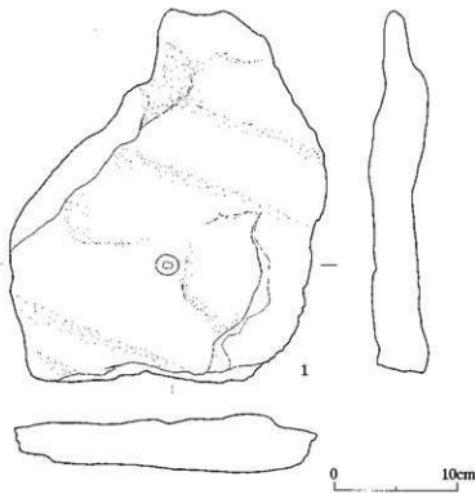
第39図 2号配石 出土土器・石器



第40図 3号配石 出土土器・土製品



第41図 4号配石 出土土器



第42図 5号配石 出土石器

の口縁部には巾広の沈線がめぐる。5～7は条線を地文とする。6は綾杉状の条線文が施され、直線および波状の沈線が配される。7は渦巻状の沈線文が配される。8は無文の浅鉢。9・10は無文地に微隆起線が縦位に

#### 6号配石（第33図・図版11）

D-3区。確認面は5号住居址の覆土中層で、本配石の直上約20cmで1号埋設土器や1号焼土址が検出されている。礫は長軸2m・短軸50cmの範囲で弧状に集中するが、東側は未調査区外まで広がるようである。礫は5cm～20cm大が多いが、60cm大の平石も混じる。この内側にも礫が散在し、これらをまとめた範囲は南北約2.5m・東西約2mで、5号住居址の堅穴範囲内におさまる。礫に被熱痕はない。

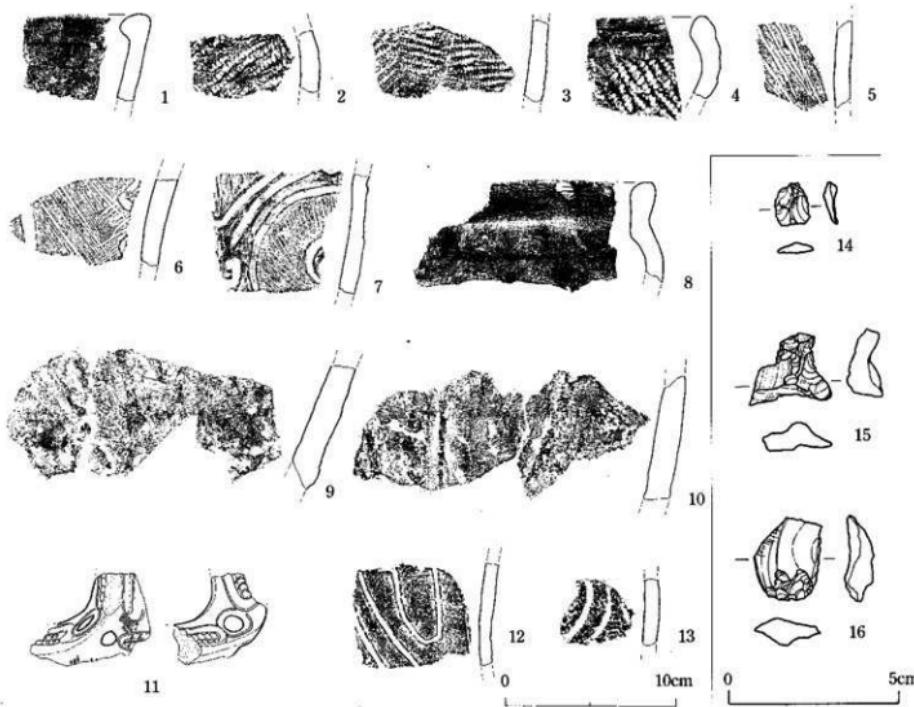
遺物は、礫の内外から土器や石器が多く出土し、黒耀石の微細な剥片が目立つ。（第43図・図版20）。

土器：1は深鉢の無文口縁。2～4は縄文を地文とする。2は縫帶が貼付され、4

付く深鉢で、同一個体と思われる。11は釣手土器で、釣手根元の破片である。口縁から張り出した鋸が釣手までせりあがり、釣手根元の鋸には貫通孔がある。文様は縄文を地文とし、連続爪形文を伴う半隆帯が施される。12は緩くくびれた胴部に沈線文、13は縄文地に曲線的な沈線文が配される。

以上の土器のうち、1～11は中期の曾利期にあたる。1は曾利古式、2・3は曾利Ⅱ～Ⅲ式、5～7は曾利Ⅳ式、4は加曾利E 4式、9・10は曾利V式に比定される。12・13は後期の堀之内式。

石器：加工痕のある剥片（14～16）で、この他にも微細な剥片が多い。すべて黒縞石製である。

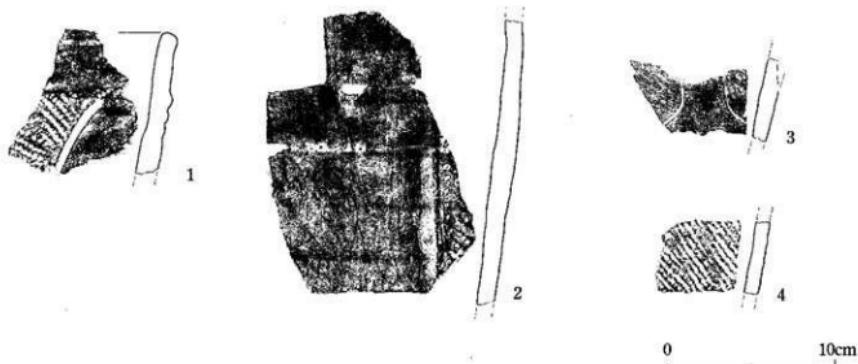


第43図 6号配石 出土土器・石器

#### 7号配石（第32図・図版11）

C・D-3区。確認面は第Ⅲ層中で、5号住居址に隣接する。50cm～60cm大の平石2枚が並べられ、40cm離れて方形配石がある。方形配石は平石5枚を立てて長方形に組み、長軸45cm・短軸40cmを測る。掘り方は長軸60cm、短軸50cmの不整長方形で、最深20cmである。覆土は暗褐色土の単層で、炭粒をわずかに含む。焼土は含まれない。礫に被熱痕はない。

遺物は礫に混じって土器4点が出土した（第44図・図版20）。1・2は断面三角の微隆起線が付く。3は沈線区画の縄文、4は縄文が施される。いずれも加曾利E 4式に比定される。



第44図 7号配石 出土土器

#### (6) 遺構外出土遺物

遺物は土器と石器に分けられ、石器量が非常に少ない。いずれも第Ⅱ層中に多く含まれ、平面分布は、5マイン以北で検出された配石群の分布範囲とはほぼ一致する。

##### 土器（第45～49・51図・図版22～23）

土器はすべて破片で、接合できても完全な形に復元できた資料はない。接合関係は、5号住居址周辺と5号配石周辺の2カ所においてわずかに認められた。時期は、縄文時代中期中葉から後期前葉に分類でき、とくに曾利式期から称名寺、堀之内式期で占められる。

1～2は、隆帯に沿ってキャタピラ文・波状沈線が施される。中期中葉。

3～50は、中期後葉～末葉に位置付けられる。

3～5は、頸部無文帯を挟んで、口縁上部と胴部に縄文地の文様帯を持つ土器と思われる。隆帯で区画された口縁上部に横S字状の隆帯が施され、頸部のくびれには横位・波状の隆帯が施される。曾利I式期。

6～14は、粘土紐による波状の隆帯が貼付され、胴部の地文は7～13は縄文、14は条線地である。15～16は、口縁部に文様帯を持ち、口唇内面に断面三角形の隆帯が貼付される。撚糸文を地文とする。胎土には金雲母・石英を多く含む。20、撚糸文地文。6～15は曾利II式期、16・17は曾利III～IV式期であろう。

21～26は、胴部の条線地に低平な隆帯が付き、24は波状沈線が垂下する。曾利IV式期に比定される。

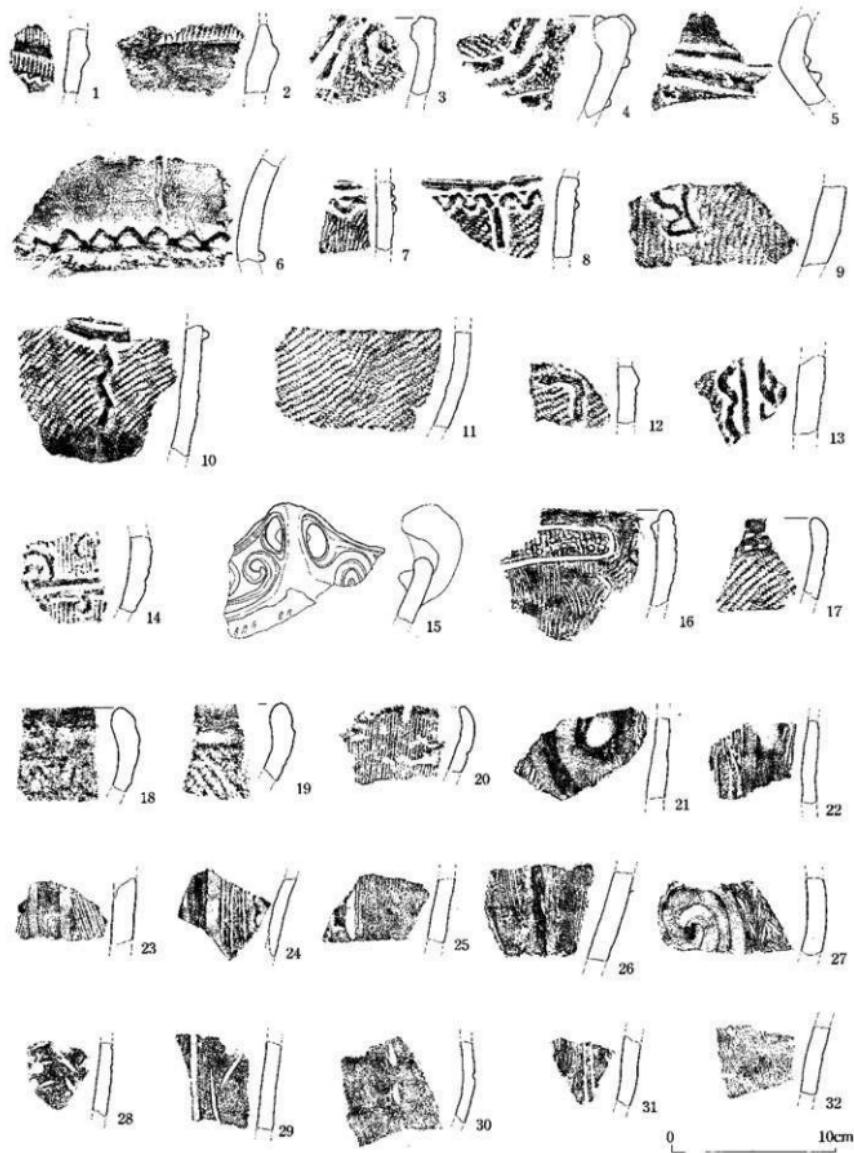
27～31は短沈線、32は櫛描状の条線が施される。曾利V式期に比定される。

18・19、33～46は沈線区画の縄文、47～48は隆帯区画の縄文である。35・36の口縁下には隆帯がめぐる。加曾利E4式に比定される。

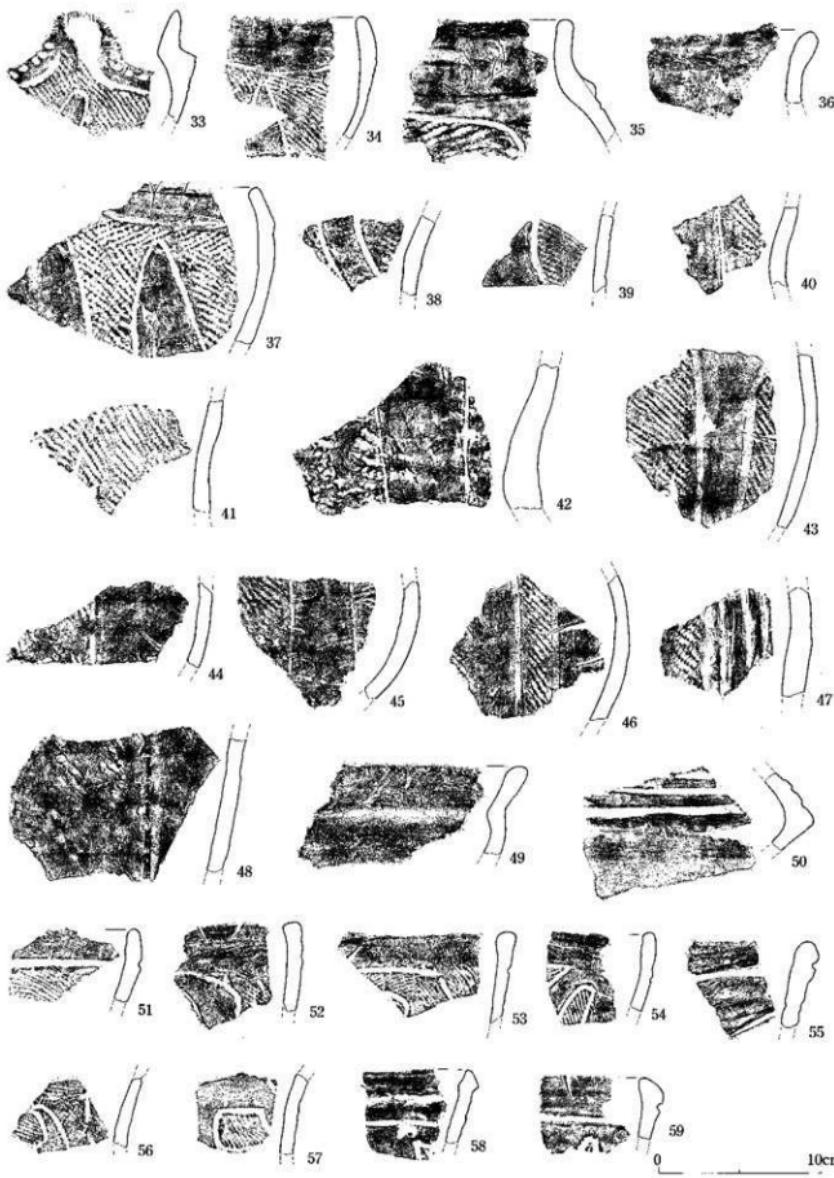
49～50は浅鉢。

51～124は、後期初頭～前葉に位置付けられる。

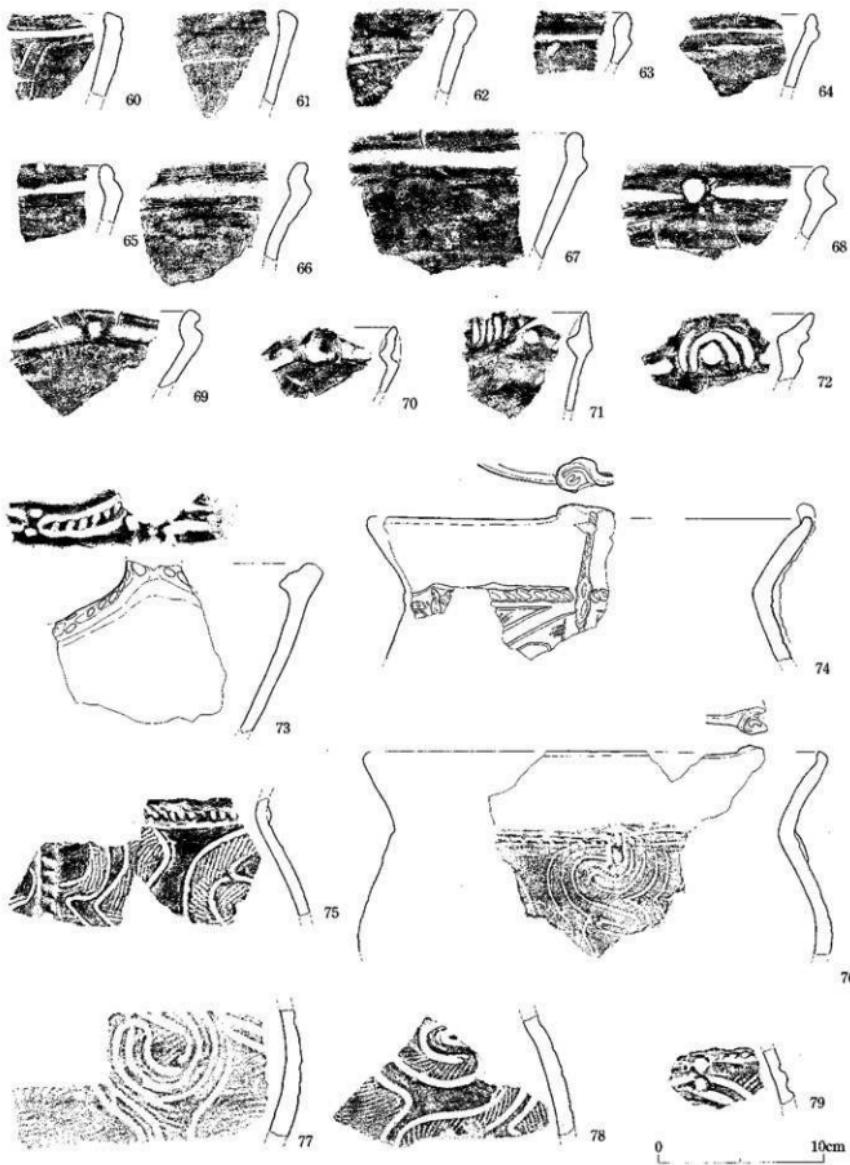
51～57は磨消縄文、58～59は屈曲する沈線文が施される。称名寺式に比定される。



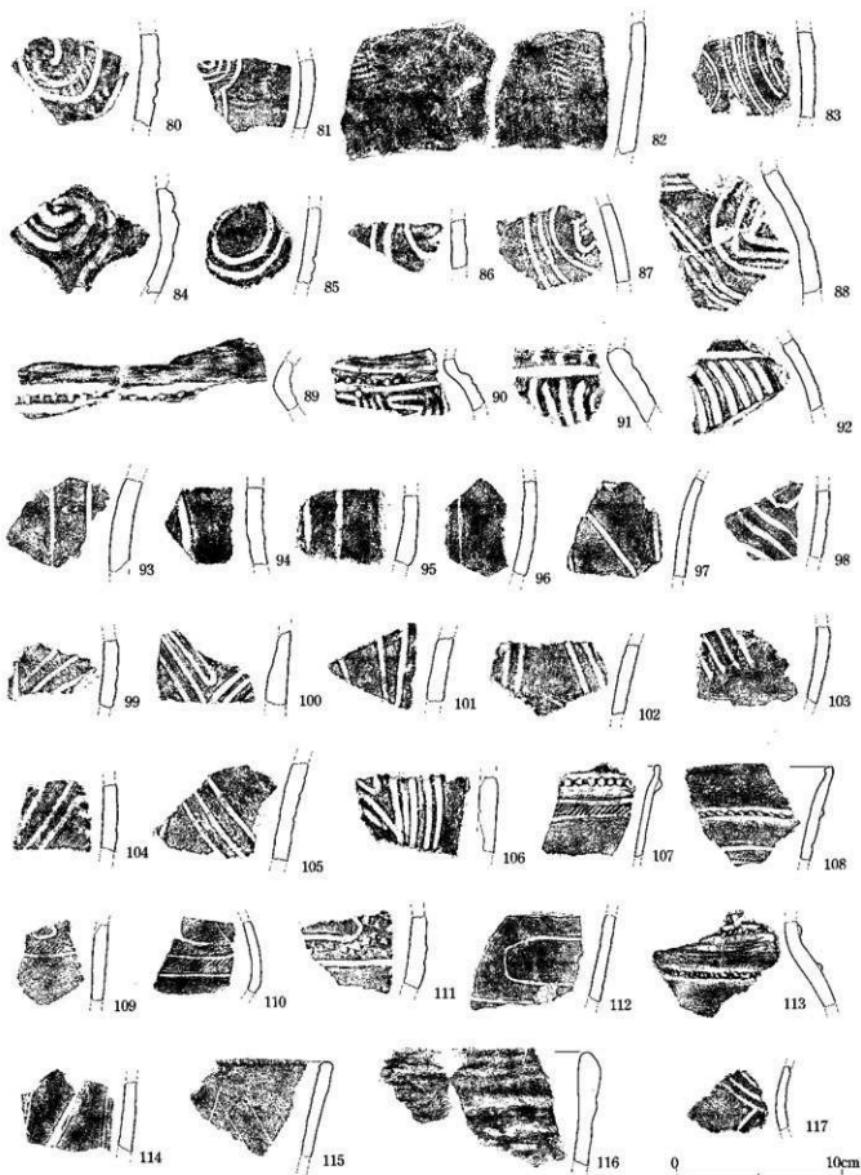
第45図 遺構外出土土器



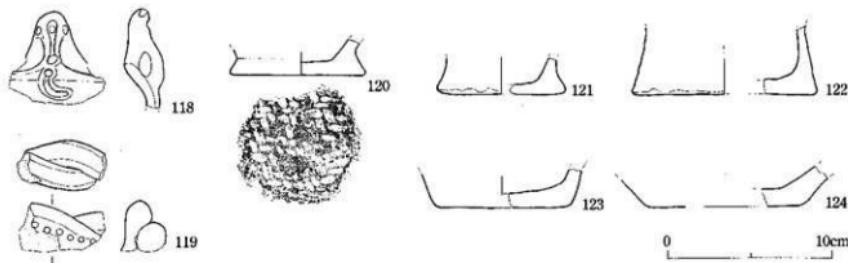
第46図 遺構外出土土器



第47図 遺構外出土土器



第48図 遺構外出土土器



第49図 遺構外出土土器

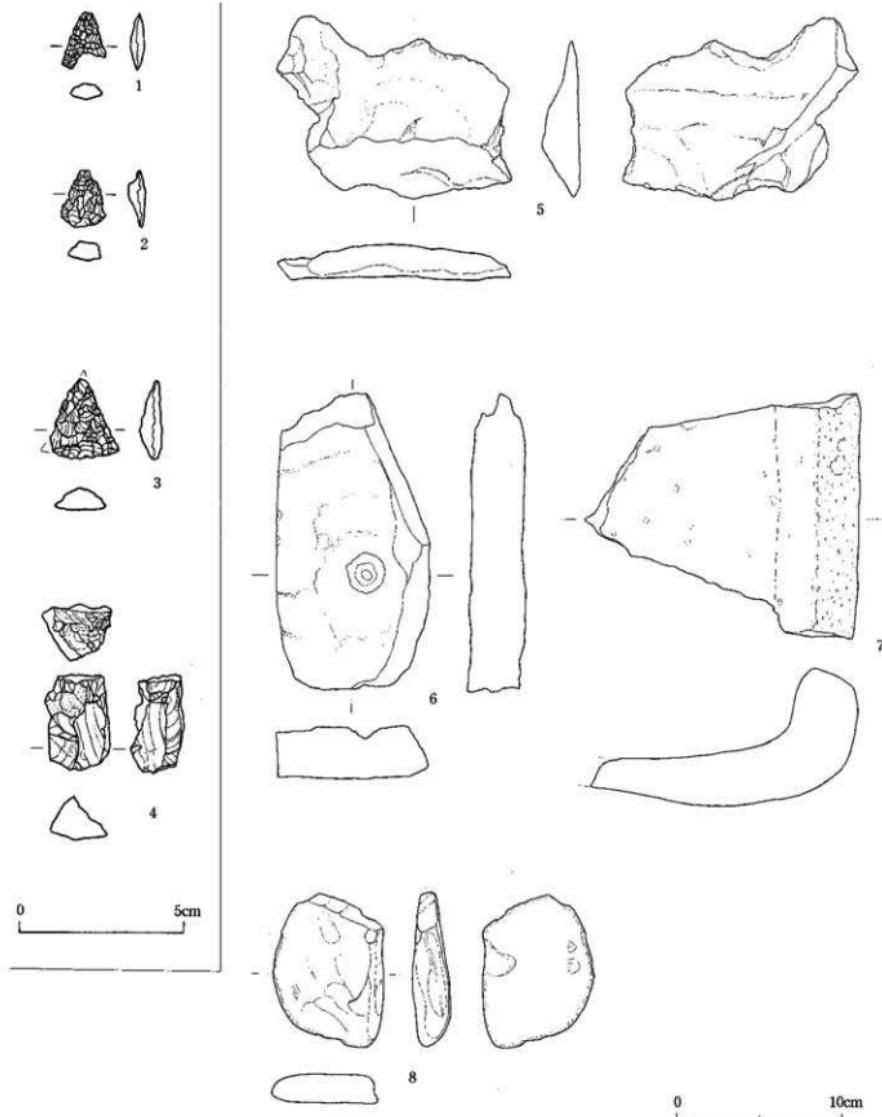
60～72は口縁部に沈線がめぐるもので、61～62は口縁下位に、60・63～72は口縁端部に施される。とくに68～72は、小波状を呈する口縁部に円形刺突や短沈線が加えられる。73は波状口縁の上端に沈線区画の文様が配される。74～92は、頸部で屈曲し胴部が球状に張る深鉢で、胴部に主文様が配されるものであろう。74～83は縄文地に沈線文、84～92は沈線文が主体である。93～106は、胴部に沈線文が配された深鉢で、このうち99～106は平行沈線が斜位・縦位に施される。107～109・112、直線的に口縁が開く深鉢。110、注口土器の体部。111、113、胴部の張る深鉢。114、横歯状の細い条線。116、無文の深鉢。117、緩くくびれた胴部で、縄文地に弧状の沈線文が施される。以上の土器は、堀之内式に比定される。

118は、注口土器の把手部。119は、2本の粘土紐が燃り合わせられ、両側面に円形の刺突文が並ぶ。把手と思われる。120～124は底部。以上の土器は、堀之内式に比定されると思われる。

#### 石器（第50図・図版23）

器種は、石鎌、加工痕のある剥片、石匙、凹石、石皿、砥石があり、この他に黒曜石の剥片が若干出土している。時期は、中期後半から後期に含まれるものと思われる。

1～3は、黒曜石製の石鎌。4は、加工痕のある剥片で、黒曜石製。5は石匙。6は凹石。7は石皿。8は砥石で、両面や側面に、溝状に凹む磨滅痕が残る。



第50図 遺構外出土石器

出土地	番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (kg)	石材	被熱痕	備考
1号法船坂	16	石 砕	2.4	2.1	0.4	1.2	チャート		充て、日落風車
*	17	加工痕のある片岩	1.9	1.5	0.6	1.1	玄武岩		一般に表面面が残る。石頭尖削部から
*	18	使用痕のある片岩	3.0	1.9	0.9	3.7	黒雲母片岩		一般に微細な網状痕が残す。
*	19	砂 砕	9.5	9.2	2.6	196	葉状石ホルンフェルス(1)		一般に刃跡、被熱痕なし。
*	20	円 砕	19.0	12.3	5.5	1600	片状の瓦岩(2)		背面に圓状の凹み、2穴
*	21	*	15.0	12.0	10.0	3130	花崗岩		片側に立次打痕、複数
*	22	*	21.3	17.0	7.0	4000	片状の泥岩		片面にV字状の凹み、6穴
*	23	*	25.0	17.5	7.0	3500	*		片面に直状の凹み、2穴
*	24	*	20.0	14.0	5.5	970	花崗岩		両面に磨痕、V字状の凹み各2穴
*	25	*	19.0	16.0	9.5	5650	*		両面にV字状の凹み各4穴、背面に凹面
*	26	赤 砕	15.0	9.0	5.8	400	黒雲母片岩		背面に剥離が残している。
*	27	石 砕	30.0	18.0	7.5	1200	石英閃緑岩		赤化・風化
*	28	砂 砕	32.0	8.0	15.0	4500	片状の瓦岩		赤化・風化
*	29	碧玉石斧	11.5	5.0	2.0	280	ドライイト(3)		電力式。両面に研磨痕
*	30	柱狀石斧	27.5	9.0	6.0	3800	砂 砕		両面真方形
2号佐原坂	31	スクレイパー	3.5	2.8	0.7	5.7	チャート		鋸齿に片削加工の滑い刃部
*	33	砂 砕	8.5	6.1	4.4	350	細粒の砂岩		片面に擦れと空打痕
*	34	*	13.5	7.1	3.5	600	花崗岩砂岩		疎開。裏面に浅い凹み、端に斜削痕
*	35	*	5.2	3.5	2.3	70	珪質の泥岩(4)		表面に凹形で、裏面が強烈な擦痕
*	36	*	12.0	6.4	4.3	510	*		一般に磨痕
*	37	角 砕	20.5	6.2	4.9	980	*		両面に磨滅した鏡打痕
*	38	閃 石	(19.5)	(12.5)	11.9	3400	石英閃緑岩		両面にV字状の凹み、立次打痕、磨痕
*	39	台 砕	17.2	8.8	7.0	1450	中粒の砂岩		赤化・風化
*	40	石 砕	5.9	4.9	1.3	60	含礫泥岩記録		片面にV字状の凹み
*	41	地脚石斧	(4.9)	5.3	2.5	100	玄武岩質の凝灰岩(5)		刃足端、完全式
*	42	石 砕	33.5	22.0	6.5	7450	石英閃緑岩		両面に平次打痕、立次打痕
*	43	*	30.5	27.5	9.0	8160	*		
*	44	石 砕	(22.0)	10.5	8.9	3700	ヒン岩		両面欠損
*	45	地脚石器	35.6	(14.5)	10.7	5100	砂 砕		表面擴え丸長形。片面に磨痕
3号佐原坂	46	奥製石斧	10.2	6.8	3.7	460	硅質灰岩の凝灰岩		小形の乳鉢状
*	53	石 砕	(18.0)	10.3	(9.5)	2130	安山岩質の凝灰岩(6)		端面欠損、钝く風化する
*	56	石 砕	(35.0)	(21.0)	10.0	8750	石英閃緑岩		片面にわずかにむき面、浅い凹み1穴
1号鏡子坂	1	石 砕	1.1	1.2	0.2	0.5	黒雲母片岩		下基盤部。
2号配石	4	石 砕	(19.0)	(18.0)	7.8	4200	灰岩		片面にわずかにむき面
*	5	石 砕	25.0	19.0	11.0	9870	*		
5号化石	1	石 砕	22.0	19.3	3.0	1950	片状の泥岩		両面にV字状の凹み2-3穴
6号加工石	15	加工痕のある片岩	1.1	0.9	0.2	0.3	矽岩		平面に角部。石頭尖削部から?
*	16	*	1.9	2.3	0.7	3.3	*		自然端あるいは風化した気泡面が残る
*	17	*	2.5	2.1	0.5	2.9	*		片面の凹面から直線剥離
造園外(D-1区)	1	石 砕	1.7	1.3	0.4	0.6	*		即墨灰岩。片側欠損。
*	2	*	1.7	1.3	0.4	0.8	*		孟宗竹の葉?
*	3	*	2.3	2.0	0.5	2.1	*		新都木にわずかに丸い
*	4	加工痕のある片岩	3.0	1.9	1.5	8.4	*		角端部が残る。
*	5	石 砕	14.4	9.8	2.3	310	砂 砕		軋・打ち欠孔による刃部
*	6	砂 砕	16.3	9.5	3.2	900	片状の瓦岩		片面にV字状の凹み1穴
*	7	石 砕	(15.0)	(15.5)	4.0	1510	角閃石安山岩		表面にV字状の凹み、複数
*	8	武 砕	9.5	6.8	2.2	140	砂 砕		平端面と傾斜面、溝の縦溝

第1表 石器観察表

注 (1) 草原石ホルンフェルス 泥岩を源岩とする接触変成岩。この種の岩石は、本遺跡の西方、大苦麻嶺の周辺で広範に分布する。

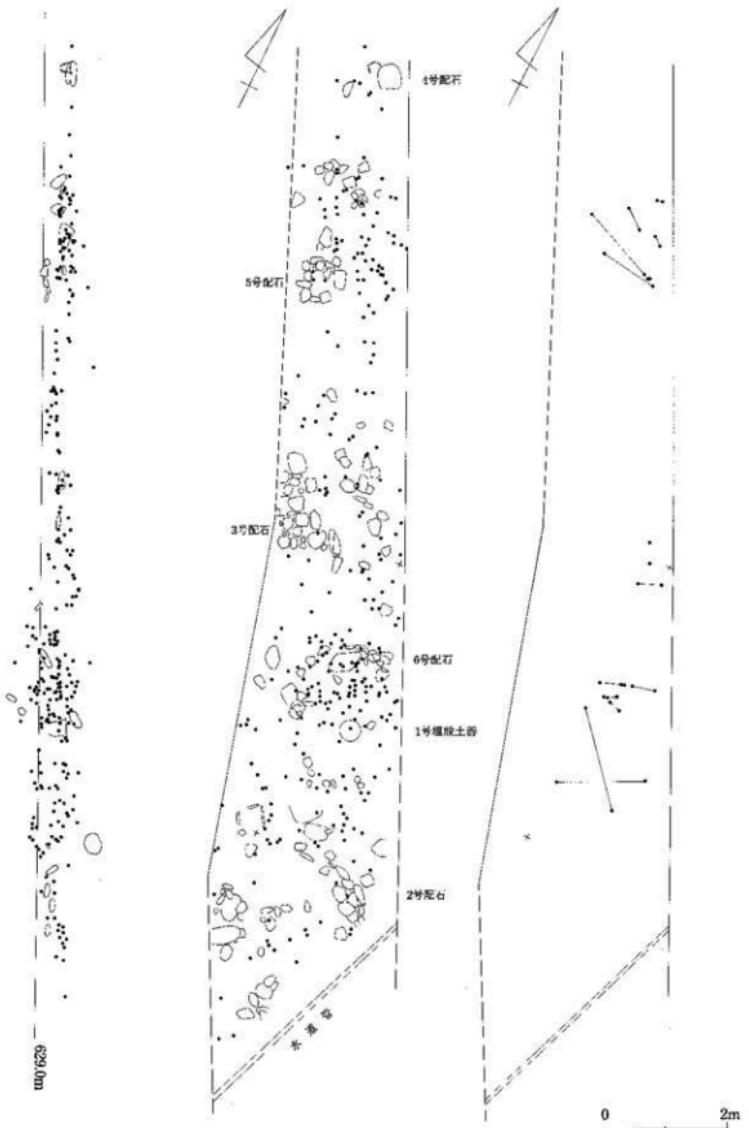
(2) 片状の泥岩 -般に「千枚岩質粘板岩」と呼ばれる。本遺跡周辺(小仏崩断)に多く分布する。

(3) ドレライト(相鉄玄武岩) 徒歩は「輝綠岩」と呼ばれていたもので、苦鉄質の半深成岩。周辺では、丹沢山地の一部地域、横形山地の一部地域、関東山地北東部などに、比較的多く分布する。

(4) 珠質の泥岩 一般には「珪質粘板岩」と呼ばれる岩石で、本遺跡周辺(小仏崩断)に多く分布する。

(5) 玄武岩質の凝灰岩 徒歩は「輝綠凝灰岩」と呼ばれていたもの。関東山地の一部と丹沢山地や御坂山地の一部地域に多く分布する。

(6) 安山岩質の凝灰岩 径5mm以下の赤色スコリア・青灰色岩片・斜長石・角閃石の結晶が多く含まれている。丹沢山地・御坂山地に多く分布する。



第51図 土器分布・接合図 (5ライン以北)

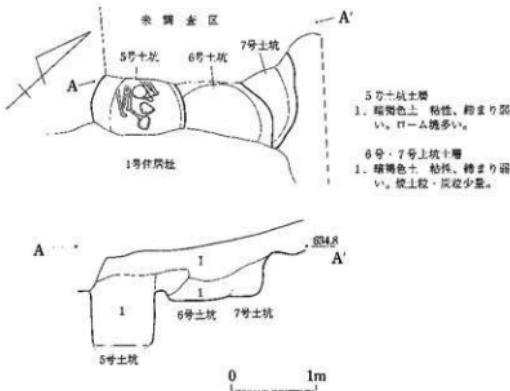
## 第2節 近世

墓壙1基がある。近隣に江戸時代の墓標が数基現存する。

### (1) 土坑

#### 5号土坑（第52図・図版12）

K-8区。西側は未調査区にかかる。1号住居址・6号土坑を切って構築されている。確認面は第IV層上面である。墓壙。平面は直径約1mの円形。壁は垂直である。覆土は単層で、ハードローム塊を多量に含む暗褐色土である。約80cmの深さで人骨1体分が確認された。遺存状況は良く、頭蓋の左右に大腿骨から脛骨が直立していた。このことから被葬者は、床に腰を下ろして胸の前で膝を折り曲げた状態で埋葬されたものと推定される。また人頭大の礫が骨に混じって2点出土している。遺物は未確認。本造構の時期は江戸後期から末期に位置付けられる。



第52図 5号～7号土坑

## 第3節 時期不明

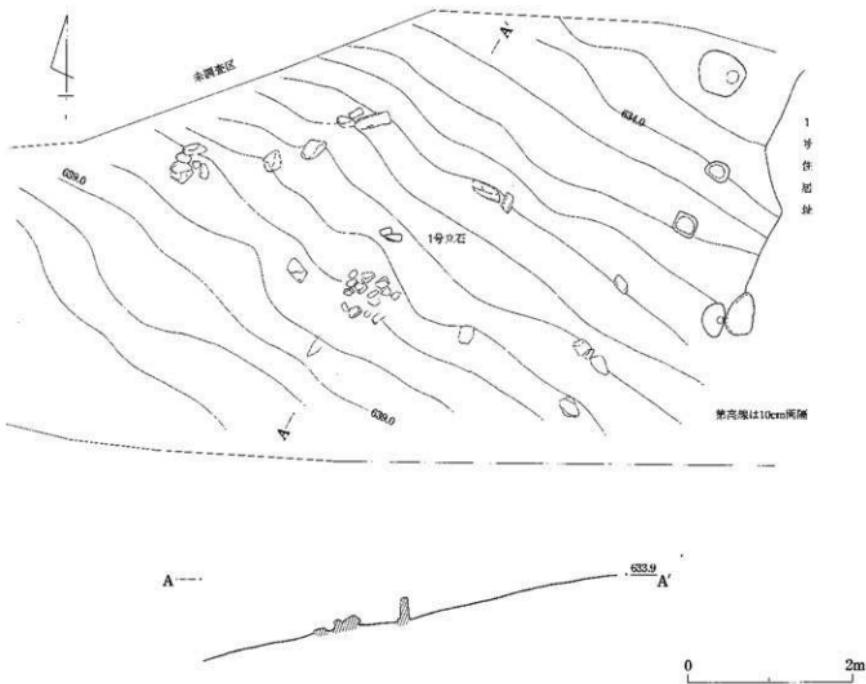
立石1基、土坑6基がある。斜面上方に集中する。確認面は第IV層上面。

### (1) 立石

#### 1号立石（第53図・図版12）

J-8区。1号住居址と2号住居址の間に位置する。試掘調査の際、厚さ約40cmの表土を除去中に確認された。立石は直立し、基部は第IV層上面に埋設されている。高さ約30cmの半石で、半滑面が斜面下方に向かっている。表面は凹凸があり、基部は固定のため礫が添えられている。周辺を精査したが付属施設は見つかなかったため、単独の遺構と思われる。伴出遺物もない。時期・性格とも不明。

なお、本造構は、原地区と郷原地区とを結ぶ農道の脇に位置し、周辺沿線には江戸時代の墓石が点在している。このため近世以降、古道沿いに設置された墓石や道標のような構築物とも推定されるが、本造構のように無銘の自然石を樹立させている例は周辺に見られない。



第53図 1号立石

## (2) 土坑

### 1号土坑 (第54図・図版12)

B・C-1区。確認面は第II層上面。西側は未調査区にかかる。平面は橢円状で、南北2mを測る。深さは70cm。壁はほぼ垂直に立ち上り、上部でやや緩やかに開く。底面は第IV層中に構築され、平坦である。覆土は5層に分けられ、下層には多量の礫が集積されていた。礫は5cm~40cm大とまちまちである。大型の礫は重ねられ、實際が高く中心に向かって低くなる状態であった。礫に被熱痕はない。遺物は覆土中から縄文土器の細片が数点出土したが、周囲からの流れ込みと思われる。

### 2号土坑 (第54図・図版12)

L-9区。確認面は第IV層上面。西4mに1号住居址、東3mに3~4号土坑がある。平面は橢円形で、長軸1.2m、短軸95cmを測る。深さは斜面上方で90cm、下方で60cm。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は第V層

に構築され、平坦である。斜面下方の壁直下にピットがあり、規模は直径15cm・深さ18cmである。覆土は3層に分けられ、上層の上面から中位にかけて礫が集積されている。礫は5cm~20cm大で、壁際から中心に向かって低くなる。礫に被熱痕はない。遺物はない。

### 3号、4号土坑（第54図）

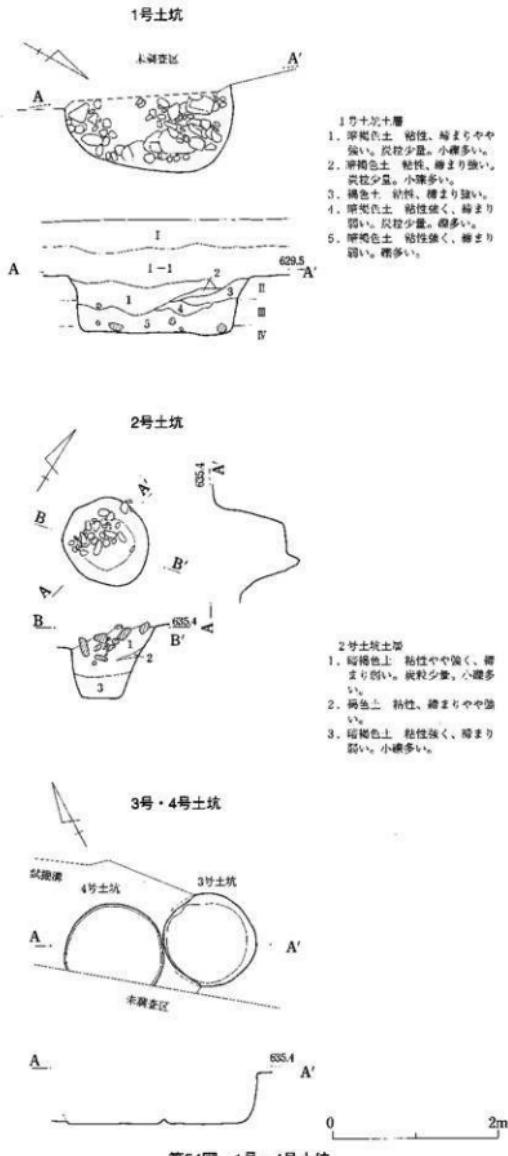
M-9区。調査区東端の最上位に位置する。西3mに2号土坑がある。試掘調査で確認された。確認面は第IV層上面。2基は隣接するが、新旧関係は不明。平面はいずれも円形で直径1.2mを測る。深さは最深60cm。壁はオーバーハングしている。底面は第V層中に構築され、平坦である。覆土は暗褐色土の単層。遺物はない。

### 6号土坑（第52図）

K-8区。西側は未調査区にかかる。1号住居址を切って構築され、5号土坑に切られている。7号土坑と重複している。確認面は第IV層上面。平面は円形で直径1.2mを測る。深さは20cm。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は第V層中に構築され、平坦である。覆土は暗褐色土の単層。遺物はない。

### 7号土坑（第52図）

K-8区。西側は未調査区にかかる。6号土坑と重複するが新旧関係は不明。確認面は第IV層上面。形態や規模は不明確だが、6号土坑と同種のものと思われる。深さは50cmを測る。壁はオーバーハングしている。底面は第V層中に構築され、平坦である。覆土は暗褐色土の単層。遺物はない。



第54図 1号～4号土坑

## 第IV章　まとめ

今回の調査で、縄文時代中期後半から後期前半の遺物・遺構が多数検出され、周辺地域の中で拠点的な集落であったことが想定される。以下に、縄文時代の成果について概述し、まとめとしたい。

### (1) 遺物

出土した遺物の大半は土器・石器である。この他、2号住居址から炭化した柱材や微細な種子が出土した。遺物の大半は中期後葉（曾利式期）から後期前葉（堀之内式）に属し、加曾利B1式で途絶えている。最古の遺物は草創期の表裏縄文土器である。石器は円石や磨石が目立つ。柱状石器は、広口の一面が磨かれるなど正面を意識した作りで、立石の可能性が考えられる。

### (2) 遺構

遺構は、敷石住居址、竪穴住居址、埋設土器、焼土址、配石が発見された。これらはすべて3m道路幅の調査であったため、遺構の全容は捉えきれていないものと思われる。このため、例えば配石の中には、住居の炉に相当するものも含まれるかもしれない。

遺構を出土遺物や層位から時期別に分けると、概略つぎのとおりである。

中期後葉（曾利式期） 1号・5号住居址

中期後葉から末葉 6号配石

中期末葉（加曾利E4式期） 1号住居址、2号・7号配石

後期初頭～前葉（称名寺～堀之内式期） 2号住居址、1号埋設土器、1号焼土址、1号・3号・4号・5号配石

後期中葉（加曾利B1式期） 3号住居址

中期後葉の遺構は、いずれも平面方形基調の竪穴住居址で、斜面下方に分布する。5号住居址は、円形の石開い炉を伴う。遺構の時期は、5号住居址は覆土下層の上器から曾利IIないしはIII式期に比定され、4号住居址は、埋設土器の様相から後出的な位置付けが考えられる。なお、5号住居址では、竪穴の埋没過程で生じた凹みを利用して複数の遺構が構築され、上層では後期初頭の埋設上器や焼土址が築かれていた。周辺は同時期の遺物・遺構の集中地域であり、凹地が、周辺の土地利用にどのような影響を与えていたのか興味深い。

中期後葉から末葉にかけて6号配石がある。これは5号住居址覆土中のスコリア質の土層中から検出されたものである。この土層中には、中期後葉から末葉の土器片その他、炭化物や墨縞石の細片が混在して出土しており、6号配石自体、この土中に投棄された礫の一群と見ることも可能である。

中期末葉の遺構は、1号住居址が斜面上方に、2号・7号配石が斜面下方に集中して分布する。

1号住居址は柄鏡型敷石住居で、隅丸方形の主体部に方形の石開い炉が伴う。張出し部には立石が据えられていて、その存在は、埋甕や張出し部が持つ祭祀的性格を象徴するかのようである。竪穴の周囲をめぐって検出されたピットは、大半が壁外柱穴に相当するものであろう。張出し部を含めた竪穴全体を覆う上屋の存在を想定できる。炉と張出し部の礫の集積は、住居廃絶時の封鎖的行為によるものと考えたい。

2号配石と7号配石は近接する。いずれも第Ⅲ層中にあり、確認レベルは7号配石が約10cm下位に位置する。2号配石は、竪穴を備えた敷石住居の可能性がある。7号配石は、2枚の大きな平石と石開い炉状の方形配石とからなる。方形配石は、内部に焼土はないが、形態や石材は1号住居址の炉と類似する。

後期初頭～前葉の遺構は、最も多く確認された。2号住居址が斜面上方に、その他はすべて斜面下方に偏在

する。2号住居址は敷石住居址で、炉は未確認である。主体部の平面は隅丸方形と推定され、内部のテラス状の段や礎帯が特徴的である。出土土器から掘之内2式期に比定できる。その他の遺構は第Ⅲ～Ⅳ層上部に位置し、1号埋設土器・1号焼土址は5号住居址の覆土中に位置する。1号配石を除き等高線に沿った形で分布し、確認レベルもほぼ一致する。

1号埋設土器は、称名寺2式期に比定される。骨等の特異な内容物は検出されなかったが、内部から加曾利E4式土器の比較的大きな破片が出土しており、あたかも内容物に蓋をしていたかのような印象を受けた。

1号焼土址は、掘り込みを伴うもので、称名寺1式土器が出土している。

1号配石は、斜面に平石が散在するもので、出土遺物はない。

3号配石は、平面が台形状の範囲に石を敷いたもので、堀之内式土器を利用した土製円盤が出土している。

4号配石は、平石2枚を重ねた脇に称名寺2式の埋設土器を据えたものである。

5号配石は、方形の石囲い炉状で、内部は焼けた痕跡が見られた。凹石1点が出土した。

各遺構の時期は、さらに細分可能と思われるが、出土遺物が少ないため確証しがたい。

後期中葉の遺構は、3号住居址のみである。敷石住居址で、円形の地床炉を伴う。主体部の平面は方形基調と推定され、テラス状の段が特徴的である。出土土器から加曾利B1式期に比定できる。

遺跡の時期別推移を見てみると、中期後葉の曾利式期に堅穴住居が営まれたのを始めとして、中期末から後期前葉にかけて敷石住居や配石が広範囲に多数作られる。後期中葉には敷石住居1軒に減少し、その後は遺構・遺物ともに途絶えてしまう。

### (3) 2号住居址の構造について

2号住居址の内部には、テラス状の段部や、祭壇状の配石を伴う礎帯がめぐっていた。礎帯は主柱穴状のピット列を覆っていたが、本来はピット列を取り巻くように内周と外周に分かれていたようである。とくに、内周の礎帯の多くが縁石状に立ち並び、下部に小礎を多く含む堅い土が検出されたことから、礎帯が、主柱の下部を固めた小礎混じりの壁体を内側から押さえる目的で付設されたものと想定できる状況であった。しかし、柱穴脇に磨石・叩石・石錘・磨製石斧がまとまって検出されていて、想定した壁体構造との関係が問題となる。外周の礎帯は、床面から浮いた状態で雑然と積まれた状況であった。上記で想定した壁体に関わる施設とも見えるが、現段階では論証不足である。一方、床面内部には、ピット列を境に遺物や被熱の痕跡が見られない空間があり、これを考えるうえで、住居屋内に板材などで補強された有段施設が想定されている富士吉田市池之元遺跡の事例は示唆的である。

このように見ると、本住居内部に数段の壁体を想定することも可能となろうが、本住居址の構造復元については周辺事例との比較を含めて、実際には更なる検討を進める必要がある。

註(1) これに類似した状況は、1号住居址の主体部縁石と壁との空間にも見られ、縁石下の柱穴脇では石錘・磨製石斧が出土した。

(2) 富士吉田市池之元遺跡の第1号住居址。堀之内2式期の敷石住居址で、住居内の壁に沿って板材で区画された有段施設が想定されている。

## 主な参考文献

山本寿々雄『山梨県の考古学』1968 吉川弘文館

上野原町誌刊行委員会『上野原町誌（上）』1975

鈴木保彦『下北原遺跡』1977 神奈川県教育委員会

椿坂恭代『フローテーション法の実際と装置』『考古学ジャーナル』355 1992

阿部芳郎他『池之元遺跡発掘調査研究報告書』1997 富士吉田市教育委員会市史編さん室

# 付 篇

## 原・郷原遺跡における自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

原・郷原遺跡では、縄文時代後期の遺構が検出されている。このうち、2号住は敷石住居跡であり、住居構築材と考えられる炭化材や、種実などが出土している。

本報告では、出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行い、遺構の構築時期に関する資料を得る。また、出土した炭化材や種実の同定を行い、用材選択や周辺植生などに関する資料を得る。

### 1. 炭化材の放射性炭素年代測定

#### (1) 試料

試料は、2号住の床面から出土した炭化材1点（試料番号4）である。

#### (2) 方法

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。

#### (3) 結果

測定の結果、放射性炭素年代は $4010 \pm 60$  (GaK-20289) であった。

#### (4) 考察

年代測定値は $4010 \pm 60$ であった。測定を行った炭化材は、縄文時代後期の敷石住居跡の床面から出土しており、住居構築材と考えられている。また、後述する樹種同定により、クリに同定されている。クリの樹齢や、伐採できる材の大きさなどを考慮すれば、樹齢による年代測定値の誤差（東村、1992）はそれほど問題にはならないと考えられる。

関東地方南部や山梨県内では、これまでにも縄文時代後期の遺物に伴って出土した炭化材、貝などについて放射性炭素年代測定が行われている。その結果では、 $5140 \text{yBP} \sim 2190 \text{yBP}$ の年代値が得られている（キーリ・武藤、1982）。このうち、 $5140 \text{yBP}$ と $2190 \text{yBP}$ の測定値は、他の測定値と比較するとやや離れており、この2点を除くと、 $4090 \text{yBP} \sim 2970 \text{yBP}$ となる。今回の結果は、この範囲に一致しており、調和的である。このことから、本住居跡は縄文時代後期初頭頃に建築された可能性がある。

### 2. 炭化材の樹種同定

#### (1) 試料

試料は、2号住の床面から出土した炭化材9点（試料番号1～9）である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表1に記した。

## (2) 方法

木口（横断面）・粧目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

## (3) 結果

表1 樹種同定結果					
遺構名	時代・時期	番号	採取地点	用途など	樹種
樹種同定結果を表 1に示す。試料番号9 には2種類が認めら れた。これらの炭化材 は、いずれも落葉広葉 樹で、2種類（オニグ ルミ・クリ）	2号住（敷石住居跡）縄文時代後期	1	床面A	住居構築材	クリ
		2	床面B	住居構築材	クリ
		3	床面C	住居構築材	クリ
		4	床面D	住居構築材	クリ
		5	床面E	住居構築材	クリ
		6	床面F	住居構築材	クリ
		7	床面G	住居構築材	クリ
		8	床面H	住居構築材	クリ
		9	床面I	住居構築材	クリ オニグルミ

ルミ・クリ）に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

- ・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura)

クルミ科クルミ属

散孔材で、道管径は比較的大径、単独または2～3個が複合して散在し、年輪界付近でやや急に管径を減少させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性～異性II型、1～4細胞幅、1～40細胞高。

- ・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は1～4列、孔圈外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

## (4) 考察

住居構築材と考えられる炭化材は、全てクリであった。また、試料番号9には、クリの他にオニグルミが認められた。このことから、2号住居跡の構築材は、クリを中心にオニグルミなども利用していたことが推定される。いずれも強度が高い材質を有しており、強度を重視した用材選択がうかがえる。

山梨県内では、白州町上北田遺跡で縄文時代前期初頭の住居構築材について樹種同定が行われており、今回と同様に住居構築材にクリを主とする種類構成が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1993a）。縄文時代の住居構築材にクリが多い結果は、神奈川県藤沢市湘南藤沢キャンパス内遺跡（パリノ・サーヴェイ株式会社、1993b）など、関東地方南部でも多くの遺跡で報告されている（千野、1983, 1991；高橋・植木、1994）。このことから、同様の用材選択が、関東地方南部から山梨県に至る広い地域で見られたことが推定される。

クリは、縄文時代の植物食糧としても重要な種類であり（粉川、1983）、縄文時代に栽培が行

われていた可能性が指摘されている（千野、1983）。その開始時期としては、各地での材や種実の出土例から、縄文時代早期頃と考えられている（山田、1999）。クリは、9年生～10年生以後から20年生前後の樹齢が成果期であり、一般に20年生以後は収量が減少する（志村、1984）。このことから、若木を果実確保のために保護・管理し、老木を伐採して用材として利用した可能性が考えられている（千野、1983）。本遺跡についても同様の可能性があるが、現時点では詳細は不明である。

### 3. 種実遺体の同定

#### (1) 試料

試料は、2号住から出土した種実5点である。各試料の詳細は、同定結果と共に表2に記した。

#### (2) 方法

双眼実体顕微鏡で、その形態的特徴から種類を同定する。

#### (3) 結果

結果を表2に示す。同定可能であったものは、試料番号12と13のみであり、いずれもエノキグサ近似種 (*Acalypha cf. australis L.*) の種子であった。卵型で大きさは1mm程度。先端部はやや尖る。表面は薄くて堅く、細かな瘤みが配列し、ざらつく。

表2 種実同定結果

番号	遺構名	試料名	種類名
10	2号住	床面焼土	不能
11	2号住	床面焼土	不能
12	2号住	配石覆土	エノキグサ近似種
13	2号住	配石覆土	エノキグサ近似種
14	2号住	配石覆土	不能

#### (4) 考察

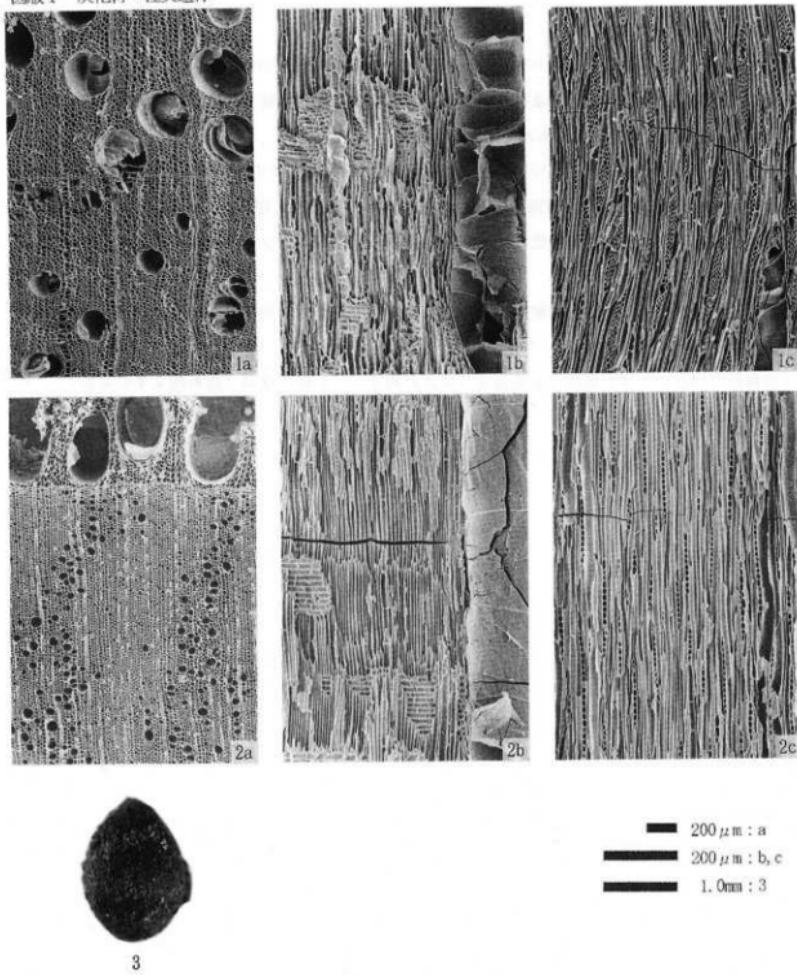
種実遺体は、配石覆土から出土した2点がエノキグサ近似種に同定された。エノキグサは、開けた場所に普通にみられる1年草であり、とくに重要な用途はない。したがって、今回の種実は、集落内にエノキグサが生育しており、そこから住居内に入ったと考えられる。

### 引用文献

- 千野裕道（1983）縄文時代のクリと集落周辺植生－南関東地方を中心に－. 東京都埋蔵文化財センター研究論集, II, p.25-42.
- 千野裕道（1991）縄文時代に二次林はあったか－遺跡出土の植物質遺物からの検討－?
- 東村武信（1992）改訂 考古学と物理化学. 212p., 学生社.
- キーリ C.T.・武藤康弘（1982）縄文時代の年代. 加藤晋平・小林達雄・藤本 強編「縄文文化の研究1 縄文人とその環境」, p.246-275, 雄山閣.

- 粉川昭平（1983）縄文人の主な植物食糧. 加藤晋平・小林達雄・藤本 強編「縄文文化の研究 2 生業」, p.42-49, 雄山閣.
- パリノ・サーヴェイ株式会社(1993a)上北田遺跡から出土した炭化材および炭化種子の同定. 「山梨県北巨摩郡白州町 上北田遺跡 県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, p.1-5, 白州町教育委員会・狭北土地改良事務所.
- パリノ・サーヴェイ株式会社(1993b)自然科学分析からみた人々の生活（1）. 慶應義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」, p.347-370, 慶應義塾.
- 志村 敦（1984）クリの生育特性. 「農業技術体系 果樹編5 クリ基礎編」, p.11-16, 社団法人農山漁村文化協会.
- 高橋 敦・植木真吾（1994）樹種同定からみた住居構築材の用材選択. PALYNO, 2, p.5-18, パリノ・サーヴェイ株式会社.
- 山田吾郎（1999）クリを管理し北海道まで広げた縄文人. 小林達雄編「最新縄文学の世界」, p.96-103, 朝日新聞社.

図版1 炭化材・種実遺体



1. オニグルミ (試料番号9) a:木口, b:柾目, c:板目
2. クリ (試料番号4) a:木口, b:柾目, c:板目
3. エノキグサ近似種 (試料番号12)

# 図 版

図版1



遺跡遠景



調査前近景



調査風景



調査風景



調査風景



1号住居址



1号住居址 挖り方

図版3



1号住居址 炉



炉内部



張出し部



主体部



1号住居址 確認状況



2号住居址



2号住居址 摂り方

図版5



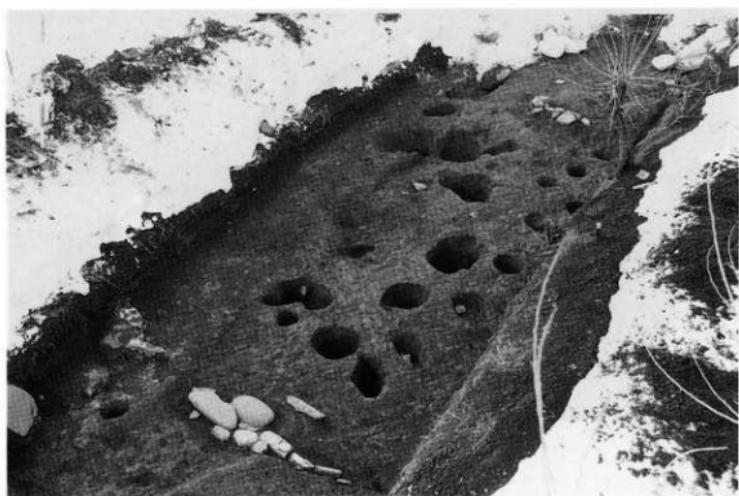
2号住居址 磚帯



2号住居址 磚帯中の配石

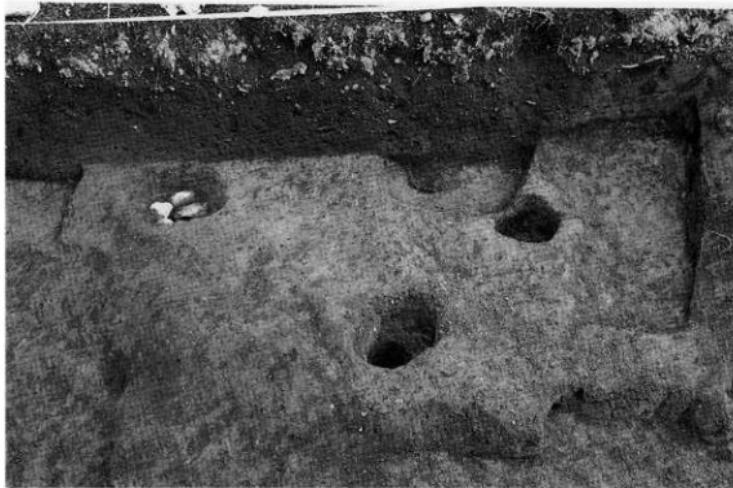


3号住居址



3号住居址 挖り方

図版7



4号住居址



5号住居址



1号埋設土器



1号配石

図版9



2号配石



3号配石



4号配石



5号配石

图版11



6号配石



7号配石



配石全景



1号立石



1号土坑



2号土坑



5号土坑

図版13



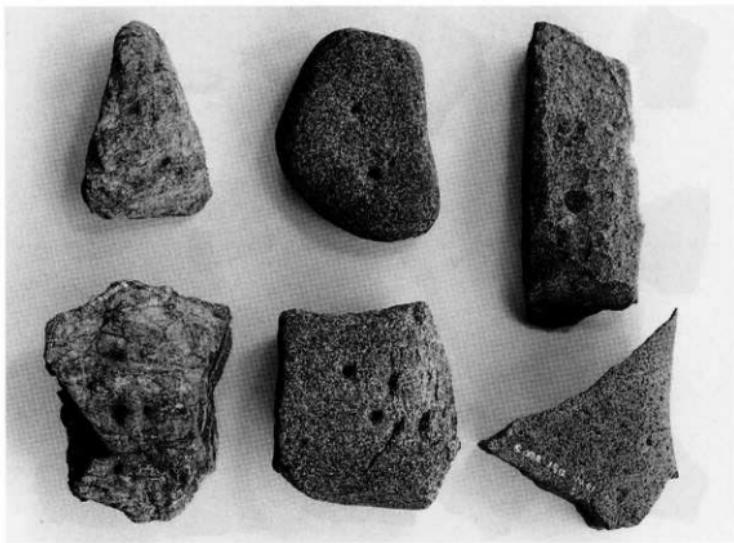
1号住居址 埋甕



1号住居址 出土土器



1号住居址 出土石器



1号住居址 出土石器

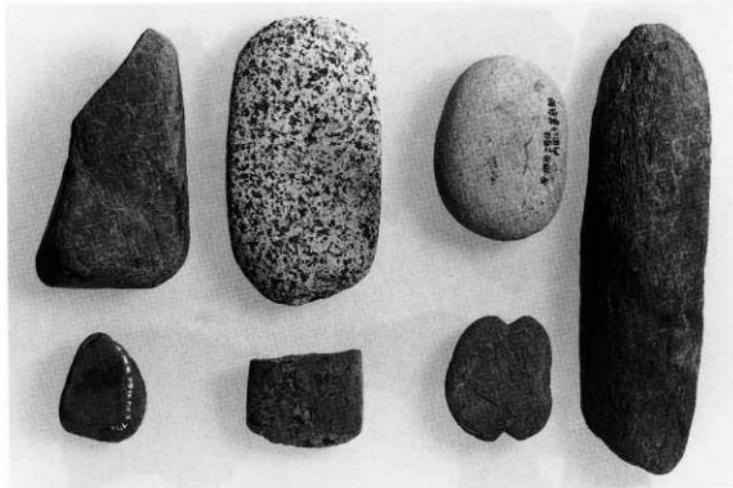
図版15



2号住居址 出土土器



2号住居址 出土土器

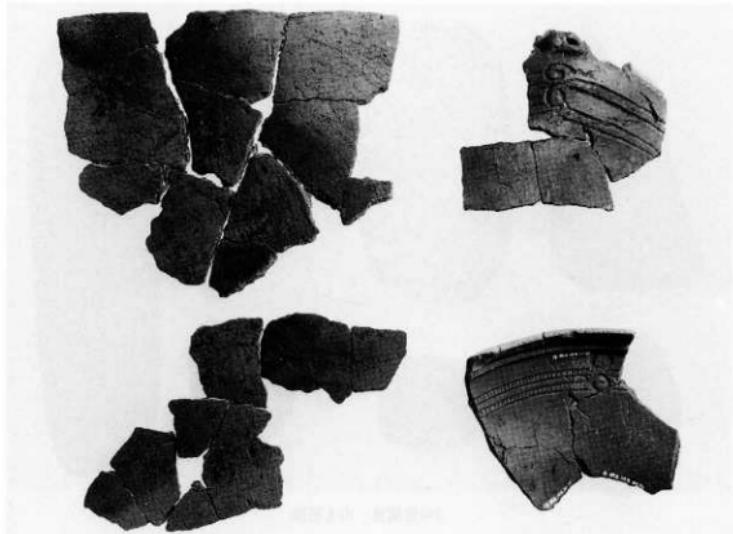


2号住居址 出土石器

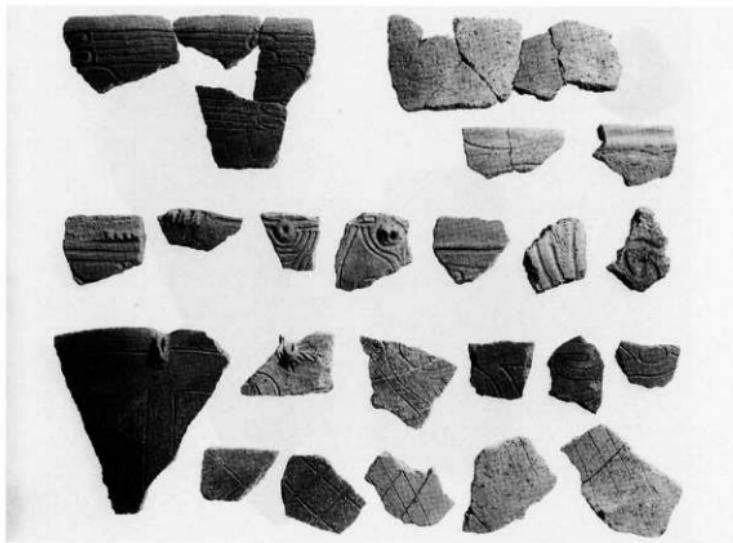


2号住居址 出土石器

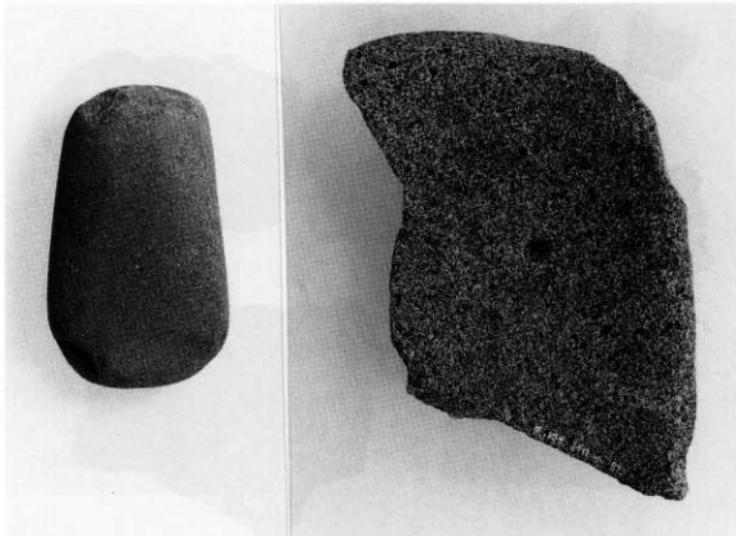
図版17



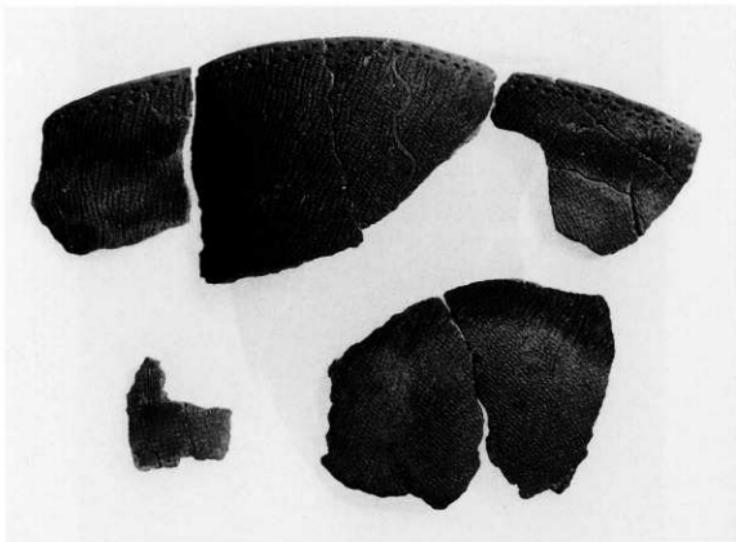
3号住居址 出土土器



3号住居址 出土土器



3号住居址 出土石器



4号住居址 出土土器

図版19



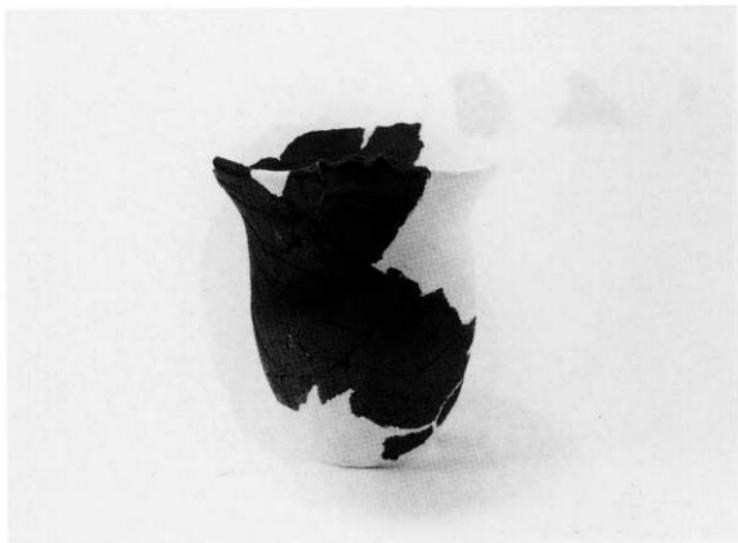
5号住居址、1号埋設土器、1号焼土址 出土土器



1号埋設土器

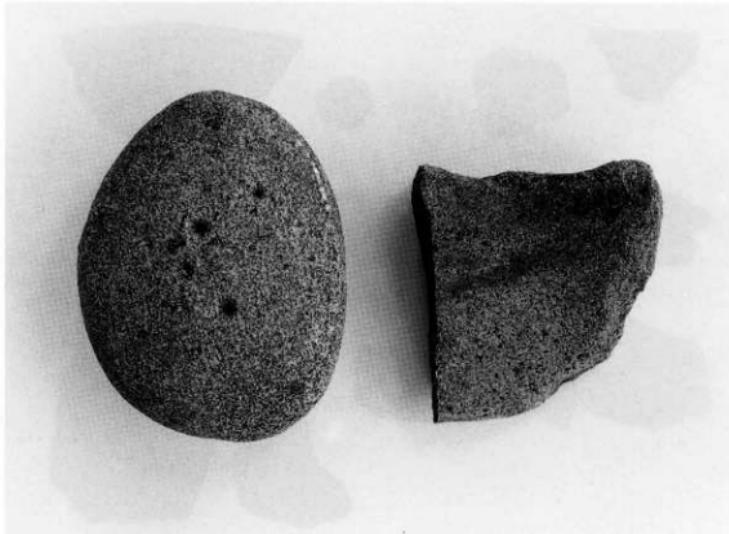


2号・3号・6号・7号配石 出土土器

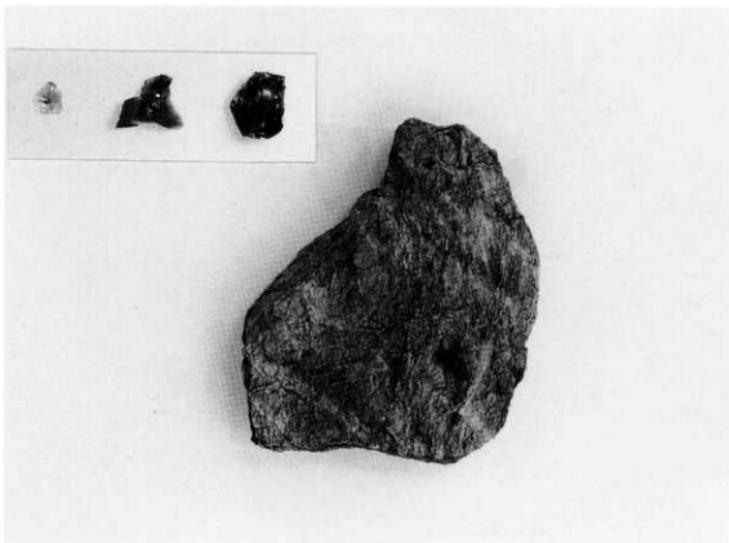


4号配石 出土土器

図版21



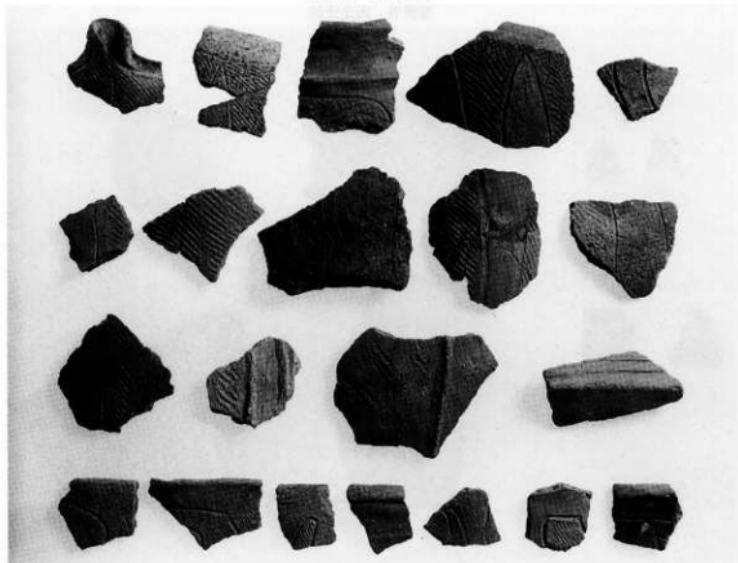
2号配石 出土石器



5号・6号配石 出土石器



遺構外 出土土器

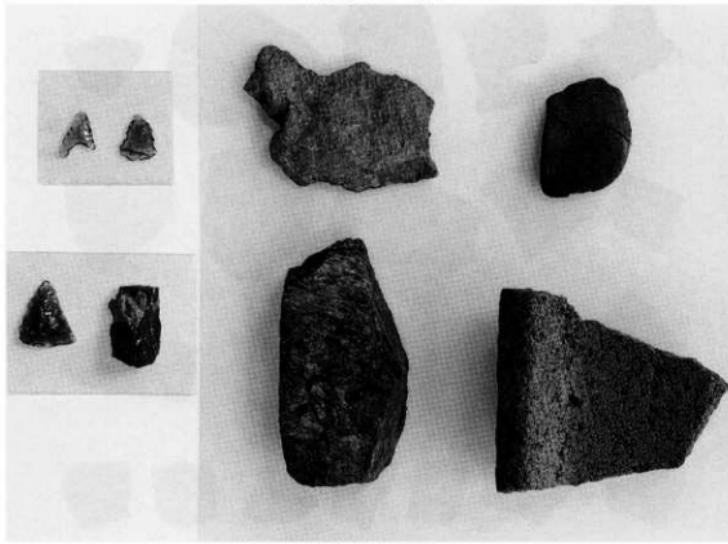


遺構外 出土土器

図版23



遺構外 出土土器



遺構外 出土石器

## 報告書概要

フリガナ	ハラ・ゴウハイセキ
書名	原・郷原遺跡
副題	県営中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ	上野原町埋蔵文化財調査報告書 第9集
著者名	小西直樹
発行者	上野原町教育委員会・山梨県都留土地改良事務所
編集機関	上野原町教育委員会
住所・電話	〒4090112 山梨県北都留郡上野原町上野原3504-1 TEL0554-623111
印刷所	中島印刷
発行日	平成12年（2000）9月29日
原・郷原遺跡	所在地 山梨県北都留郡上野原町西原4699 番地他
	地図名 25000分の1 猪丸、位置 北緯35° 42' 20" 東経139° 1' 5"、標高630m
概要	主な時代 縄文時代中期・後期
	主な遺構 敷石住居址・堅穴住居址・配石・埋設土器・焼土址・土坑
	主な遺物 縄文式土器・石器
調査期間	平成9年（1997）11月18日～平成10年（1998）2月13日

上野原町埋蔵文化財調査報告書 第9集

## 原・郷原遺跡

平成12年（2000）9月29日発行

編集 上野原町教育委員会

発行 上野原町教育委員会

山梨県都留土地改良事務所

